

## 桑名・柏崎日記に現れた児童発達と家族生活（1）

小嶋 秀 夫

現在のわが国で行われている子育てと教育の社会的・文化的背景を、歴史的に検討しようとする試みが、民俗学、歴史学、教育学、文化人類学、社会学、思想史、社会史を始めとした多くの領域で進められてきた（例、有地、1986；原・我妻、1974；久木ほか、1977；中江、1985；大田ほか、1979；桜井、1982；脇田、1985；山住、1984）。これらが使用する資料と分析の視点・方法はさまざまであるが、多くは子育てと教育、あるいは、それとかかわる諸条件の、過去から現代までの連続性と変化を探ろうとしており、同時代の外国との比較の視点を入れたものもある。このような過去との対話がいくつもの学問領域で行われることを通して、現在をより広くかつ長い歴史的な文脈の中に位置付けて理解できるようになることは、子育てと教育を扱う1つの学問分野にいるものとして歓迎したい。

しかし発達心理学や教育心理学の分野では、上記の問題に関してのわが国での本格的な研究は、まだこれからという段階に止まっている。筆者はこの点を残念に思い、児童発達観を中心とした若干の理論的考察と方法論の検討をするとともに、近世の資料の分析結果を報告してきた（小嶋、1979、1982、1983a、1983b、1985；Kojima、1986a、1986b）。これらの試みを通して、筆者は、発達心理学・教育心理学の研究者が寄与できる問題があることを、いよいよ強く感じるようになった。たとえば、1つの資料に関しても、医学、教育学や思想史の研究者とは異なった読み方を、発達研究者である筆者はするのである。異なった視点の交流の効果を期待するのならば、発達研究者としても、単なる受益者に止まるのではなく、積極的な役割を果たすべきであろう。最近の1つの例外は、横山（1986）による明治以降の子育ての社会史の出版である。ただし、近世の資料をいくらか見てきた筆者の視点に立つと、横山のいう明治以降の動向にも、違った解釈ができる面がある。提出した問い次第であるが、この領域では、少なくとも近世にまで戻ることの意味は大きいと思う。

ところで、この領域での筆者のこれまでの仕事は、近

世の子育ての書の分析であった。それらの啓蒙書またはハンドブックは、アドバイスの書であって、その内容は「これこれであるから、このようにするのがよしい」という prescriptive な性格をもっている。それがわが文化がもつ ethnopsychology の一側面としての「ナイーブな子育ての理論」を解明する上で、重要な位置を占めることは、これまで筆者も主張してきたところである。

それに対するものとして挙げられるのが、「このように子どもを取り扱っていた」という descriptive な側面での情報である。筆者の中心的興味は、個々の具体的な取り扱いよりも、その背景にあると理論的に考えられる ethnopsychology にあるが、それを今から構成するには、個々の取り扱いについての記述的資料がいる。

そのための資料としては、これまで各種のものが使用されてきた。すなわち、屋代弘賢が文化年間（19世紀初め）に行った全国的な質問紙調査（竹内ほか、1969）、回顧的（retrospective）報告を中心として民俗学が収集した産育習俗（たとえば、大藤、1969；斎藤、1985）、明治初年に行われた民事慣例の調査（司法省、1877、1880）、江戸時代の紀行文（菅江真澄、1971-など）、16から19世紀にかけての外国人による日本の子どもと子育ての記述（例は省略する）などである。そのほか、間接的資料ではあるが、鎌倉から江戸時代にかけての絵画の中に描かれた子どもの姿や、江戸時代の文学作品の中に登場する子どもとその扱いも参考になる。

このように多様な資料はあるが、それらの多くは、間接的・断片的で当時の生活の文脈から切り離されていたり、また、多くの民俗誌的データに共通する問題点（すなわち、歴史的時間に関する情報の欠如や、報告された特定の習俗の普及の程度が不明であることなど）を免れていないことのために、入手できる情報から過去を構成することには困難が伴う。とくに、実際的な生活の状況（context）の中での個体の発達を問題にする発達心理学の立場からすると、個人水準での記述が何としても欲しいのである。

Pollock（1983）は、1500年からの4世紀間における

西洋での親子関係を、そのリストが実に17ページにも及ぶ日記・伝記類から構成している。彼女が分析に使用した資料の大部分が、出版されたものであることには驚かざるをえない。わが国でも多数存在が知られている日記や文書類の中に、同様の情報が含まれてはいないだろうか。これらの諸資料が、そのような視点から整理され、利用できるようになるのを待つばかりである。

現在、筆者が利用できる明治以前の唯一の資料が、この論文で取り上げる渡部平太夫・勝之助による桑名日記・柏崎日記である。これは以前から部分的な翻刻も出ており(堀田吉雄校訂, 1971), 民俗学, 児童学や国語学の研究者たちによって注目されてきたものであった(彦坂, 1984; 堀田, 1969; 本田, 1986; 本田・皆川・森下, 1985; 皆川, 1982, 1985)。そして、この2つの日記(桑柏日記と呼ばれることもある)の全体の翻刻が、澤下春男・澤下能親校訂(1984)によって現れて、始めて一般のものが、約200万字からなるとされる全文を読むことができるようになったのである(注1)。

それは、次に示すように、幕末の下級武士による1組の交換日記ともいべきものである。それが書かれた期間は正味約9年であるが、子どもの発達とそれにかかわる家族生活を中心とした詳細な記述が含まれていて、上に述べた個人水準での descriptive な資料として類稀なものといえる。そこで、桑柏日記に見られる子どもの発達と生育環境とを、発達心理学の視点からまとめて記述し構成することをこの論文で試みる。分量の関係で、全体をほぼ2分して、この論文では天保14年末までの分を扱い、残りの部分の分析と全体的討論は、次の論文で行うことにする。

### 桑柏日記の成立(注2, 3)

幕末の天保年間、桑名藩(久松松平氏11万石)の下級武士であった渡部平太夫(9石3人扶持、後に10石3人扶持)には、後を嗣ぐ男の子がいなかったため、白河在住時に実家の片山家から甥に当たる勝之助を養子に迎えていた(文化14年)。桑名への移封(文政6年)後、勝之助は新屋敷の佐藤家のおきく(菊: 平太夫の妻の姪に当る)を娶り(天保5年11月)、柳原に住んだ。

第1子鑠之助が満2歳になった天保10年(1839)初めに、勝之助に柏崎陣屋への転勤命令が出た。寛永12年(1635)に大垣から移った後も、桑名→高田→白河→桑名と移封を重ねた松平家であったが、寛保元年(1741)の白河への移封の時以来、越後の分領5万石支配のために柏崎陣屋が築かれていた。それは預領5万石も兼治する役割も負っていた(国史大辞典, 吉川弘文館, 1983)による。ただし、真吾の残した記録により、分領の石高を

上記のように改めた)。当時の柏崎陣屋には、約60人の藩士がおり、また、勝之助の記録によれば、柏崎の町家の数は3,000近く、10万石の領地の中枢であった(柏, 天14. 9. 10)。

さて、勝之助が陣屋勤務を拝命したとき、妻おきくは第2子の出産を控えていた。矢田積(やだがわら)庚申堂に住んでいた平太夫夫婦におきくと鑠之助を託した勝之助は、柏崎に単身赴任した(天10. 2. 24出発; 3. 5到着)。1月足らず後に、第2子おろく(録)が誕生した(3月19日)。その後一旦桑名に戻ってきた勝之助は、おきく、おろくを連れ同伴者1名と柏崎に旅立った(同年5. 30発; 6. 12着)が、鑠之助[2: 5]は祖父母とともに桑名に留った。

まだ現役で御蔵の仕事をしていた平太夫は、勝之助が単身赴任の旅に出た日から日記を書き始め、それは死の3日前まで、大きな途切れもなく書き続けられた。それは実に足掛け10年、正味9年に及ぶものであった(桑名日記: 1839. 4. 7-1848. 4. 7)。

一方勝之助も、家族を連れて柏崎に赴く12日間の旅の日記をつけ(旅日記)、柏崎に一家で落ち着いてしばらくしてから(柏, 天10. 8. 6), 本格的な日記を書き始めた(柏崎日記: 1839. 9. 13-1848. 4. 25)。それは平太夫の死の15日後まで、ほぼ途切れなく書き続けられ

1) 今回の分析は、ほぼ全面的に澤下春男・澤下能親校訂(1984)による翻刻版によって行っている。それは校訂者の自費出版(全7冊+解説1冊)によるもので、この論文執筆の時点で、なお若干の残部があった。校訂者の住所:

澤下春男 〒510 四日市市高花平3丁目1-36

なお、桑名日記を400字詰め原稿用紙に換算して6,900枚ほどとした(堀田, 1969)のは計算ミスで、実際には、2,750枚前後となる。

2) 日記への言及は〈 〉で囲んだ日記名と日付により行う。桑名日記、柏崎日記、旅日記のそれぞれを桑、柏、旅で表す。また、天保、弘化、嘉永はそれぞれ天、弘、嘉で表し、年の途中の改元の時点で表記を切り換えた。必要によってグレゴリオ暦で示したが、それには下記の資料を使用した。

内田正男 日本暦日原典 雄山閣出版 1975。

3) 日記に登場する子どもの年齢を細かく表示する必要があるときには、0歳台には[月; 日], 1歳以降は[年: 月]で示した。必要により、[00週]と表示した場合もある。後の2つの場合には、日を切り捨てている。これらの年齢の計算は、すべてグレゴリオ暦により行った。

た。両日記は、直接あるいは江戸経由などの幸便に託して交換され、相手方の地で保存された。柏崎では、日記がつけられている期間中に第5子まで誕生するが、その9年間、桑名の3人と柏崎の勝之助一家とが顔を合わせる機会は一度もなかったのである。

両家族は、交換日記のほかによく書状をやりとりしていた。その内容は日記の中での言及から部分的に推測されるだけであるが、一般的にいて、用件と緊急性のある情報、あるいは、極く個人的な情報などは書状によって、そして、子どもの発達、家族生活、職業生活、天候、天変地異、事件や風聞、物価などの記述は主として日記によってコミュニケーションされたものと思われる。

日記に記載する内容は、当然ながらそれを書く目的によって左右される。桑柏日記は、2つの土地に分かれて住む渡部家の情報交換のためのものであるから、読み手が知りたがるであろうと推測されること、あるいは、相手に是非とも伝えたい事柄が記載されるであろう。そして、受け取った日記の内容に対する反応が読み手の日記に現れることが、相手側へのフィードバックとして働くのである。たとえば、記述された子どもの言動にお互い

に「大笑い」し、そして、「おかしきことあり」と日記に記述するのである。もちろん、愉快なことばかりが書かれるわけではない。天保13年末近くから、勝之助は家族の病気に悩まされ続ける。日記には、暗く居たたまれなくなるような記述が続き、おばば(増)がもう聞きたくないというほどであった(〈桑, 天14. 8. 19〉など)。

今回の分析の主対象である子どもの発達と家族生活の姿は、書状によってもコミュニケーションできる。しかし、毎日規則的に記述し、その日に書き忘れたことは1、2日後に書き足すなど、日記のもつ逐次性は、記述が事象を代表する程度と、歪みの少なさの点で、書状よりもはるかに優れた資料となる。しかも、日記においても、日本語の特徴である直接に見聞したことの報告と、伝聞に基づく報告との区別は、きちんとなされている。たとえば、平太夫も勝之助も、一日中子どもの相手をしているのではないので、直接に見聞できなかった事柄は、他者の報告を日記の中に取り込むことによってカバーしている。すなわち、「……だけな」、「……と〇〇さまのお話なり」、「……候由」といったような形の記述がよく出てくるのである。

表1 渡部家の人々

西 暦	1839	1840	1841	1842	1843	1844	1845	1846	1847	1848 年	
年 号	天 保					弘 化				嘉 永	
年	10	11	12	13	14	15/1	2	3	4	5/1	死 亡
平太夫 (1784年生)	55	56	57	58	59	60	61	62	63		[1848 ; 63]
増 (妻)	→ 桑名日記			54		56		58			[1862 ; 73]
鏡之助 (第1子) (1837. 1. 14生)	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	[1856 ; 19]
おろく (第2子) (1839. 5. 2生)		1	2	3	4	5	6	7	8		[1866 ; 27]
真 吾 (第3子) (1842. 5. 20生)					1	2	3	4	5		[1908 ; 65]
おりん (第4子) (1845. 10. 5生)		→ 柏崎日記								←	[1845 ; 0]
行三郎 (第5子) (1847. 3. 6生)									1		[1851 ; 4]
勝之助 (1802年生)	37	38	39	40	41	42	43	44	45		[1865 ; 62]
おさく (妻)	←①	②	26	③ 28		30	④	32⑤		⑥→	[1854 ; 39]

注：桑名と柏崎の渡部家の人々を示す。平太夫の末娘と考えられるおなかと、日記終了後に柏崎で生まれたおてつとは、省略してある。横の—は生存した期間を示す。表の中の数字は、およその満年齢を示し、[ ]中には死亡年とその年齢を示す。なお、下線を付した年齢は、数え年で表したものである。①②…は、子どもの出産を示す。表中の人物は、平太夫と真吾のみが桑名で没したほかは、全員が柏崎で没している。表中の年月日はグレゴリオ暦で示してある。詳細は本文を参照のこと。

おきくや桑名のおばばを始め、子どもたちと接触をもつ親戚のものや隣人たちは、子どもの行動や出来事の観察者・報告者として、貴重な役割を果たした。なかでもおばばは、平太夫の視点では十分にはとらえにくい事象を観察して、ある程度の一般化をした記述ができる優れた情報提供者であった。たとえば、平太夫-鑛之助の関係の記述<桑, 天13. 6. 22; 天14. 3. 2>や、鑛之助が泣く状況の説明<桑, 天14. 2. 13>である。

おばばとおきくは、直接日記を読んだであろうか。おばばの方は視力の問題もあって、直接には読まなかったとされている。一方おきくは、ときに書状のやりとりもして、ある程度は読めた。勝之助一家が桑名を立ってからの桑名日記は、勝之助だけに知らせればよいと平太夫が判断した情報を除いて、かなを中心にして書かれている。これは、おきくが直接読むことを予想してのこととされている。しかし、柏崎で「日記読み」の習慣が定着すると、桑名日記にも漢字を使用する率が高まってくる。すると、おきくは勝之助や、かれの留守中には近所の人に読んでもらうこととなる(例: 柏, 天14. 10. 3)。

ところで、2つの日記は、家族内部で読まれて話題にされるだけではなく、親戚、近隣の人々、同僚たちにも読み聞かされたり読まれたりして、完全に私的なコミュニケーションの手段には止まらなかった。そのことは、両方の日記の中でもしばしば記述されている。

日記と書状のほかにも両家族間のコミュニケーションのルートがあった。それは、桑名から柏崎へ、あるいはその逆方向に移動した人が、相手の家族の消息や子どもの顔貌などを伝えたことである。ときには、柏崎へ行く人に意図的に鑛之助の姿を見せ<桑, 天13. 3. 26>, 柏崎で直にその報告を聞く<柏, 天13. 4. 10>というようなこともあったのである。そのほか、大坂経由の日本海回りで桑名から味噌などを送ることもあった。

さて、澤下・澤下(1984)の推定によると、平太夫の死(嘉永1. 3. 7)の後にかれの妻と鑛之助が柏崎に移った時点(同年9月)で、柏崎日記も桑名から運ばれ、勝之助の第3子の真吾によってまとめられた(1854年以降)。そして、両日記は、明治元年に妻子と妹でつ(鉄: 勝之助夫婦の第6子で、この子を出産した翌日、おきくは死亡した)を伴って桑名に帰った真吾により持ち帰られたものとされている。

日記には、一部分失われたのではないかと思われる箇所がある。たとえば、天保14年秋に勝之助が公務で急に江戸に行くこととなった事情を記した日記が桑名に届いている<桑, 天14. 閏9. 17>。しかし、現在の柏崎日記にはその前後の部分が欠けている。また、虫喰いのた

めに判読不可能な部分もある。それでも、元の日記に書かれた情報の大部分に、今日のわれわれは触れることができるのである。

表1は、澤下・澤下(1984)と、その下にある渡辺氏系図の写し(明治32年6月, 真吾作成)とを主なより所として筆者が作成した年表であるが、仮のものであることを断っておく。

## 分析の対象とする領域と分析の方法

### 対象領域

両日記の記述のうち、主たる対象領域を次の2つに絞る。すなわち、(1)勝之助・おきくの間生まれた最初の5人の子どもの発達、そして、(2)子どもたちの発達と相互規定的な関係をもつ、家族生活を中心とした生育環境である。さらに、付加的にはあるが、(3)上記の2つの背景にある社会的・文化的環境を取り上げる。

(1)の子どもの発達は、(a)身体の成長、移動と運動の発達、および、病気に関する領域、(b)知的発達に関する領域、そして、(c)社会的・情緒的発達に関する領域に一応分けて記述する。ただし、いうまでもなく、人間の行動は、複数の領域での機能の相互連関によって繰り広げられ、発達して行くものである。従って、この3つの領域の区分は、あくまで便宜上のものである。たとえば、遊びはa, b, cのどの領域とも関係しうる。また、言葉の発達は、bにもcにも関係するのである。

(2)と(3)とは、子どもの発達と係わり合う環境要因である。Bronfenbrenner(1979)の用語を使うと、(2)ではmicrosystemとmesosystemとが、そして(3)ではexosystemとmacrosystemとが取り扱われる。すでに筆者も述べた通り(小嶋, 1983a), Bronfenbrennerの枠組みは、その抽象性の故に、広い範囲の文化を通して適用可能なのである。

(2)で扱う2つのシステムは、発達して行く子どもを直接に含む環境である。家庭内部での人間関係、子どもと、かれらが日常的な相互作用をもつ親戚や近隣の人々との関係、子どもの仲間関係などは、microsystemの例である。次のmesosystemは、複数のmicrosystem間のシステムである。子どもとの関係に関して、桑名の渡部家とその親戚である片山家や佐藤家とがどのような関係をもっているか、また、柏崎の渡部家とお向かい(後にお隣に引っ越す<柏, 天15. 6. 15>)の竹内家との間にどのような結びつきがあるかなどは、mesosystemに関する事柄として扱う。

なお、桑名の渡部家と柏崎の渡部家とは相互に遠く隔たっているから、一人の子どもまたはおとなが、身体的に両方の場に能動的に参加することは起こりえない。し

かし、日記を主たるコミュニケーションの媒体として、両方の場で家族成員に関するエピソードが繰り返し話題に取り上げられ、隔たった土地に住む家族成員も心理的な実在感をもっている。たとえば、お互いに記憶しているはずのない、あるいは、まだ会ったこともないきょうだい同士の間、「きょうだい関係」といってよいような関係が存在していたのである。これはまさに、Bronfenbrenner (1979) のいう「場面間の知識」にあたるものの効果である。したがって、2つの土地における渡部間の関係も、mesosystem の1つとして扱うことに問題はないであろう。

(3)で取り上げるのは、(2)で問題にする2つのシステムと結び付きをもつ外のシステムであり、それは2つの水準からなる。exosystem として取り上げる主な内容には、藩士の家族の日常生活に影響するような藩のお触れ、2つの土地における社会的関係のネットワーク・システム、消費・レクリエーション・儀礼・医療を初めとする日常生活を支える外部システムが含まれる。macrosystem は、情報とイデオロギーのシステムであるが、子育てと子どもの発達や病気についての当時の知識や信念・価値のシステム、家族関係についての通有の観念、性に対する当時の社会の寛容度などが例として挙げられる。ただし、これら2つのシステムは、桑柏日記の9年間に大きな変動を示していないと考えられる。そこで、この論文では、個体の発達と共に相互調整的な変化を示す microsystem と mesosystem を扱うことにして、後の2つのシステムについては、主として次の論文で論じることとする。

以上のような領域と下位領域の内部で、さらに細かいカテゴリーを用いなければ日記に出てくる個々の記述を処理できないのは当然であるが、それには結果のセクションで触れることにする。そのうち、子どもの発達の記述に関しては、当然ながら、現代の発達心理学の一研究者である筆者の視点が強く選択的に働いていることは否定できない。また、環境要因のうち、子育ての方法に関する側面では、筆者がこれまで行ってきた近世の子育ての文献を分析するための視点に加えて、子育てのハンドブックを分析するために発展されたコーディング・システム (Stewart, Winter, & Jones, 1975), Pollock (1983) が取り上げた項目、産育習俗語彙 (柳田・橋浦, 1935), および、桑柏日記を読み進むうちに新たに浮かび上がってきたカテゴリーを考慮の対象にしたことを述べるに止める。

### 対象とする資料の範囲

この論文で直接の分析対象とするのは、桑名日記および柏崎日記の最初から天保14年末までの分に、勝之助に

よる12日間の旅日記を加えたものである。天保14年末で区切ったのは、ほぼ中ほどで二分するという便宜のほかに、2つの理由がある。1つは、その前後に、桑名の録之助 [7: 1] に発達と周囲のものによる取り扱いの移行が見られることである。もう1つの理由としては、柏崎での真吾 [1: 8] の行動発達は、おろくとの間の種々の相互作用をもたらし始め、家族の人間関係のパターンに変化が起り始めることである。

分析は澤下・澤下 (1984) の翻刻版によっている。原本の明らかな書き誤りは正して読んだ。また、必要によって、桑名市立図書館所蔵の写真版を参照した。

### 分析の方法

上記の対象領域・下位カテゴリー水準の項目を列に、日を行に配した1月ごとのカードを両日記別々に作成し、関係する記述をチェックして行った。チェックは各カテゴリーの中身を識別できる記述で行い、また、真吾誕生後の柏崎日記では、複数の子どもを識別できるようにした。この整理カードを手掛かりにして、必要に応じて、各下位領域、あるいはカテゴリー水準での日記の記述を時系列に沿って読み、そのまとめを利用して記述を行ったのである。

今回の分析目的に限定したとしても、膨大な量となる両日記の記述を現代語で要約してカード化することは、必要な時間と産出されるカードの量からして大変な作業となる。試みにサンプルとして両日記からほぼ1年おきに取り出した延べ17日分の記述の処理だけで、筆者は、丸1日以上と1200字詰めワードプロセッサ出力で7枚半を要した。これの三百数十倍もの作業をするゆとりは今の筆者にはない。そこで、上記のような整理カードをガイドに、もとの日記に立ち戻る方式にしたのである。

特定の事項に関する記述を時系列的に読んでまとめて行く過程で、当然読み手の頭のフィルターが働く。そこに、科学的な分析方法としては、不透明な要素が入り込むことになる。しかし、この種の資料の分析には、そのことは常についてまわるのである。以下に筆者が報告する結果は、原資料に対する筆者の頭の中での選択・解釈・圧縮の過程を幾重にも経たものであって、いわば、分析者と結果とが一体となったものである。別の分析者が、筆者のとかなり違った結果を報告することがあっても、何ら不思議ではない。

なお、この論文では、わが国の異なった時代や階層、あるいは、外国の文化との比較はめざしていない。しかし、筆者の頭の中にあるそれらに関する知識が、情報の取捨選択に何らかの影響を与えていることは否定できないので、暗黙のうちに、何かの比較がなされることも起

ころであろう。

## 分析の結果

このセクションでは、最初に、対象とした期間中における桑名と柏崎での子どもの生活とその環境の概要を述べ（1，2），続いて、方法のセクションで触れた下位カテゴリー別に、まとめた記述を行う（3）。

### 1. 桑名での鎌之助の生活とその環境

一言でいうと、桑名での鎌之助の生活は、順調で幸福であった。かれが2歳半前のときに、両親はまだ生後2か月の妹おろくを連れて、柏崎へと行ってしまう。しかし鎌之助は、平太夫夫婦と、平太夫の末娘と思われるおなか（鎌之助の7，8歳上と思われる〈桑，天14. 10. 22〉）を始めとする近親者や近隣の人々，そして成長するにつれて仲間たちに囲まれ，下級武士階層ではあるが，物質的にも心理的にも恵まれた生活を送る。桑柏日記の成立の項で述べた矢田磯（河原）を中心にする，新屋敷，新地，柳原，そして，鎌之助がよく連れてもらったり仲間と出かけた走井山などは，すべて1kmの範囲にある。とくにかれがよく行き来したおきくの実家のある新屋敷へは，幼児の足でも歩いて行けるし，平太夫の家には親戚や近隣の人々，内職をする若い男女たちが，よく出入りしていた。このような環境のもとで，鎌之助は多くの人に暖かく遇され，また，自分の必要に応じて，いろいろの人を活用することができたのである。実際，幼児期の鎌之助は，大部分の時間を誰か（おとなまたは子ども）と一緒に過ごし，一人でいる時間は短かったといえる。かれ自身も，人が多く集まる賑やかな雰囲気を楽しんだことが日記にしばしば記載されている。

鎌之助は食欲旺盛な子どもで，家で多様な食物を与えられるだけでなく，訪問者がかれのためによく果物やまんじゅうなどをもってきてくれた。平太夫はたんに食べ物で鎌之助を喜ばすだけでなく，食物を与えることが子どもの成長にとって重要であると考えていた。

鎌之助は健康にも恵まれ，痘瘡も他人から羨やましがられるほど軽く経過する〔5：10〕。極めて活動的な鎌之助に，おとなは豊富な遊び道具を与えてくれ，かれは周囲のおとなをうまく活用しながら，実によく遊んだ。好奇心盛んで，何でも新しいものが好きであるとともに，社交的で，親戚を含めた他人に関心をもたれ，話題によくのぼった。このように，関心をもち，許容的・子ども中心的で，いろいろの要求を叶えてくれる周囲の人々に受け容れられ，強い制限を受けることもなく，鎌之助は活発に行動し，そして，伸び伸びと成長していったのである。

平太夫の日記から見限りでは，鎌之助にとって，両親との別離は精神的な外傷にならなかったように思える。柏崎から来る日記，書状，それに小さい贈り物をきっかけにして，鎌之助の周辺で両親・きょうだいのがたびたび話題にのぼる。かれ自身も，「おれもおかかのとこへ，じじ書いてあげよふねへ。引き出しへしまっておきなるだろふ」〈桑，天10. 11. 22〉〔2：11〕，あるいは，「おろくはどうしてこんだらうねへ。いつくるだらうねへ。……おとっさおかつさよりおろくはちいさへから，おもりするになあ」〈桑，天11. 6. 30〉〔3：6〕といっている（注4）。

また，平太夫に日記にどんなことを書いたのか読んでもらった鎌之助はいう：「……ちゃちゃ（父）がみなたらわらいなるだろふねへ。おかかなんぞがこんどえちごからかえりなつて，しょうじをばくわらりとあけなつて，またきつねがきていたら，『あのきつねのことかへ』といいなるだろふねへ。」〈桑，天12. 9. 8〉〔4：9〕。かれにとって，柏崎の両親が現実の意味をもつ存在であり続けたのは事実である。さらに鎌之助は，「おとっさ，おかつさどんな顔だらうねへ。……おろくも真吾もどんな顔だか見たへなあ」〈桑，天13. 12. 22〉〔6：0〕というような発言はしている。しかし，鎌之助が両親やきょうだいに会えないことを格別に寂しがっているようには見えない。心理的な生活のベースは桑名にあって，後にも触れるように，越後へは行きたがらない。それは柏崎の両親，とりわけおきくが鎌之助のことを不憫で仕方がないと嘆くのと対照的である。

確かに，平太夫の記述には現れないが，鎌之助には何かマイナスの行動・状態があったという可能性はある。鎌之助が桑名に留まることになったのは，たぶん平太夫たちの希望によるものであろうことを考えると，平太夫が鎌之助が寂しがっていることに気付いても意識的に抑えて（suppression），あえて書かなかったとしてもおかしくはない。あるいは，幼い子どもでも必ずしも両親と一緒に暮らさなくても差し支えはないと平太夫が信じていたとすれば，たとえ鎌之助にマイナスの反応が出たとしても，それを両親からの分離と関係付けてとらえることはせず，記述もしなかったこともありうる。

しかし筆者はやはり，鎌之助には両親からの分離が，目立った影響を与えなかったのではないかと推定する。鎌之助が両親と柳原に住んでいた頃のことは，日記中の

4) 原文を示す場合には，澤下・澤下（1984）の校訂によったが，誤読を避け読みやすくするために，必要によって句読点と表記（漢字←→かな；漢字←→漢字）に変更を加えた。

回顧的記載も少なく、あくまで推測にしか過ぎないが、少なくとも1歳台から平太夫夫妻を中心とした人々との接触を経験し、また、気質的にも難しくない鎌之助にとっては、両親たちとの別離も、たいした問題にはならなかったのではないだろうか。後にも取り上げるが、鎌之助が「おかのちより、おばばのがいっちなえ」といったように<桑, 天11. 6. 30> [3 : 6], おばばの乳をずっとなめていたことは、母親の代替ともなったのである。

平太夫は、鎌之助を自慢にし、そしてかれをうまく育てている自分を誇らしく思っていた。そして、受容的でよく相手してくれる平太夫夫婦たちとの相互作用を通して、鎌之助は、祖母・祖父に愛着し、かれには桑名がプラスの意味をもち、それと対比的に柏崎がマイナスの意味をもつようになって行った。そのことは、鎌之助にとって最も効果をもつ脅しが、「越後へやる」という言葉であったことから分かる。「柏崎へ立つ人に連れて行ってもらう」、「薬屋に頼んで越後に連れて行ってもらう」ということで、鎌之助の行動が統制できた<桑, 天13. 9. 6; 天14. 7. 4など>。また、藩士が柏崎へ出発するときなどには、一緒に連れて行かれることを警戒して、先方の家に行くことを避ける鎌之助であった<桑, 天13. 3. 26>。この脅しは、3, 4歳のときよりも5, 6歳のときの方が、効果をもった。

平太夫と鎌之助の関係は、鎌之助が祖父を同一視の対象としていると考えられる程度となり<桑, 天13. 6. 22> [5 : 6], ついには、自分はおとっさの子でなく、越後にいるおっかさが生んだ子どもでなく、「おじいさの子だ」と主張するまでに至るのである<桑, 天13. 12. 22>。

さて、鎌之助も6歳を過ぎると、おとなとの接触が中心となっていた生活から、徐々に仲間との接触が重要な位置を占めるような生活に移行して行く。そして、普通の状況下でなら、あまりおとなへの依存を必要としなくなっていくこと、おとなのコントロールからの自律性が増えていくこと、それに、ますます行動能力や活動性が増して、年老いてきた祖父母では、ややもて余し気味になることが関係して、6歳過ぎから祖父母から見た鎌之助との心理的距離が、少し大きくなって行く。

しかし6歳の段階では、知的学習にしても身体的・技術的訓練にしても、まだ本格的な導入はされていない。弓も遊びにしか過ぎない。平太夫が、積極的に学習を励ますようになるのは、鎌之助が7歳に近づく頃で、数えで間もなく9歳になるときであった。

また、鎌之助は、幼いときから平太夫の仕事に興味をもって手出しをし、平太夫に繰り返し、「鎌の手伝いには困る」と書かせている。ときには、鎌之助の手伝いが

実質的助けになることもあるが、日常生活では、その必要性も少ないので家庭内ではこれという役割もなく、鎌之助の生活はまだ遊びを中心としたものである。この状態が7歳を過ぎても続くのである。

## 2. 柏崎でのおろくと真吾の生活とその環境

桑名での鎌之助を取り巻く環境が平穏無事で、平太夫一家にもまだこれというストレスがかかっていたのに対して、柏崎での勝之助一家は、種々のストレスにさらされた。とくに真吾が生まれてからは、次々と問題が起こり、一家はそれへの対処に汲々としたのである。したがって、おろくや真吾を取り巻く状況は、両親の努力にもかかわらず、鎌之助の場合ほど恵まれたものではなかった。

そのことは、勝之助やおきくも承知していて、日記の中にも愚痴が頻繁に現れる。してはやりたいたいけれども、何ともできない二人のやるせなさが、よく理解できる。たとえば、身体の調子が悪く、食が進まなくて弱っているおきくに、勝之助が桑名からの日記を読んでやったことである。鎌之助は大幸せ者だ。8つ [満6 : 6] になっても食べ物は何でも買ってもらえる。それにひきかえおろくは僅か5歳 [満4 : 2] であるが、叱られるばかりで食べ物などを与え置いたこともない。おろくが泣くのももっともだ……などと、おきくがかきくどくので、馬鹿なことを案じるから病身になるのだと勝之助は叱る<柏, 天14. 7. 3>。しかし、その勝之助自身も、お向かいに入り浸りになるおろくのことを、向こうでは、お八つももらい親切にもしてもらえるのに、家ではげんこつをもらうだけなので無理もないことだと自嘲したこともあったのである<柏, 天13. 12. 7>。

桑名と柏崎での生活の差は現実のもので、単に、平太夫が楽天的で勝之助が愚痴っぽいということだけではない。ではいったい、何が2つの土地の渡部家の生活状態をそのように違えたのであろうか。まず、奥州白河で生まれ、養子として片山家から渡部家にきて妻を娶ったという点では、平太夫と勝之助は完全に一致する。ただ、家族を形成して長年を経た平太夫の方が、生活の基盤が安定していたことはあるだろう。

次に収入面でも、両者間の差が少しあった。まず、平太夫は、天保7年10月以来、実質的に10石3人扶持を受けていた。それに対して、柏崎赴任時の勝之助は8石2人扶持で、漸く弘化4年に実質9石3人扶持となった。バリバリの現役であり、有能多才な勝之助は、柏崎陣屋で、一人前の職務のほかに、陣屋の藩士に対する講義や子弟の教育をも引き受け、ときには特別の用務を与えられた。それらに対する若干の報奨もあったとはいえ、勝

之助の収入の方が少なかったと考えられる。あくまで廉直であったかれには、職務と結び付いた利得は考えにくいのである。

次に、一般の暮らし向きを考えると、柏崎の方が不利だとされている。柏崎日記の中にも、以前は柏崎の方が相当よい暮らしができ、いまだにそうだと思う人が桑名には多いが、今は全然違うのだという記述が何回か出てくるし、桑名に比べて物価が高いという具体的な記述を何回も勝之助がしていることから、そういえる。また、豪雪も人々の生活に圧迫を与える要因であった。実際、お向かいが大好きな1歳8か月のおろくでさえ、大雪を見せると行くことを諦める程であった〈柏, 天12. 1. 4-5〉。

このような一般的な条件の上に、勝之助一家の場合には、いくつかのマイナス要因が付け加わる。まず、かれらは蓄えもなく、収入も乏しいので、新しい土地で生活に必要な衣類や家具などを揃えることもままならなかった。また、一般に桑名より派手な付き合い・儀礼が行われ、狭い陣屋内での付き合いに、予想以上の出費が必要であった。それに、いわゆる核家族で、幼い子どもをかかえながら人手がないため、かれらは次々と子守を雇わざるをえなかった。幼い子どもを抱えながら、日常の家事や機織りをこなすことは困難だったのである。しかし子守はいつも雇えたわけではなく、また、次にも述べるように、おきくが病気がちとなったため、賃仕事をすることも十分にできなかつたし、またできる状態のときには仕事が十分にないこともあった。桑名でおばばやおなか、相当の手間賃を稼いでいたのと対照的である。したがって、勝之助一家の生活は、平太夫たちよりも経済的に苦しいものであった。しかしそれでもなお、おろく1人を育てているうちは、柏崎での生活に、貧しいながらも、いくらかのゆとりが感じられる。

病気の問題は勝之助一家の生活を困難にした1つの大きな要因である。平太夫やおばばにはそれぞれ持病があった。しかし、それは日常生活を長期にわたって困難にするほどのものではなかった。また、おばばが寝込んで、鑓之助はある程度大きくなっているし、家族内外の支援がたやすく得られるから、それは大きな問題とはならなかった。それに対して、柏崎へ行ってからのおきくは病気がちとなり、勝之助一家に大きな困難を引き起した。土地での生活になじめず、鑓之助と桑名の土地とを恋い続けたおきくの心理状態も、身体の不調の問題を増幅させることになったものと考えられる。

そこへ真吾が大病をする。生後6か月頃から前兆が現れ、後に胎毒だと診断される真吾の病気は、結局、ある程度の小康状態に達するのに1年近くもかかった。医者には頻繁にかかったが、有効な治療を受けることができ

なかった。かゆい所を掻きむしり、熱のために不機嫌となり、夜泣きする真吾の世話に掛かりつきりとなった上に、わが子の病気を治すために、摂取する食べ物に自ら制限を加えていた(毒断ち)おきくにも、いろいろの障害が出てきて、一家は大混乱に陥る。子どもが幼くて、人手が少ない核家族の悲劇である。そのしわ寄せは、おろくに来る。おろくをかわいがっていたお向かい(竹内家)や、もとの子守のおゆき一家の支援がなければ、おろくは大変な不幸に陥ったことであろう。

このような状況下で、職務に多忙な勝之助も、男性としての家の仕事のほか、家事、子どもの世話や遊び相手など、さまざまな形で役割参加する。もともと、これらの中の多くを分担していたものが、さらに増えたのである。職場も住居も、同じ狭い陣屋内にあることも幸いした。また、職場の規律にやや緩い点があったのであろう。宿直のときに子どもを来させて夕食の弁当を食べたり、家から小使いに運ばせたふとんに寝て親子で泊まるようなことは、よくしていたのである。家の仕事は、勝之助だけでなく平太夫もよくしていた。(2人とも、祖父や父がしていることに興味をもって、あれこれと手出しをする子どもの「手伝い」には、困ってはいたが)。しかし、勝之助の場合の方が、よりせっぱ詰まった必要性があったのである。

以上のような状況を見ると、柏崎で育つおろくと真吾を取り巻く物質的・心理的環境は、鑓之助のそれほど恵まれたものとはいえない。かれらの両親も、わが子を楽しませ喜ばせることを重視し、あちこちに連れていったり、家で相手になったりしていた。また、鑓之助を取り巻く社会的ネットワークよりは、はるかに狭いものではあったが、お向かいを始めとする陣屋内のおとなと子ども、それに、次々と代わる子守の中で、子どもを可愛がり、子どもの方もなついた子守たちは、勝之助の子どもの心理的生活と発達にとって、重要な役割を果たした。しかし、上に述べたいろいろの困難は、子どもたちにもおしかかったといわざるを得ない。

この項を終わるに当たって、もう一度、表1に戻っておく。そこに示したおきくの出産間隔を問題にしたいのである。桑名で生まれた第1子鑓之助と第2子おろくと年齢間隔は約2年3か月で、母乳を長く与えていた当時としては普通であろう。次におろくと第3子真吾との間が約3年開いているのが目立つ。この期間に勝之助夫婦がコントロールしていたとは思えない。なぜなら、日記に陣屋で生まれる子どものすぐ上の子どもには、おろくより年少のものも多いことを、やや気にした勝之助の記述があるからである〈柏, 天12. 9. 20〉。多分、欲していたか、あるいは少なくとも、もう生まれているの



が自然だと勝之助は考えていたものと思われる。

なぜ、この期間におきくが出産しなかったのかの原因は不明である。もともと、桑・柏両日記は、平太夫が、町の性からんだ噂をとときき書くのは別にして、生理や性的な事柄にはほとんど触れていない。「〇印はさっぱりなし」という記述〈柏，天14. 3. 3〉（おきくの生理のことか）は、異例に属する。そのほかおきくが妊娠しているのではないかと他人からは疑われるが、そのようなことは決してないという否定を勝之助が書いた事はある〈柏，天14. 7. 3〉。しかし、おきくが妊娠したことは、両方の日記からは知ることができない。そして、出産の3、4週間前になって、おきくが産前であることが分かったり〈柏，天，13. 3. 12；3. 15〉、あるいは、突如として、陣痛・分娩の記述にわれわれは出会うことになるのである。おきくが「立居難儀」〈柏，弘2. 6. 22〉なのも、後2か月と少しで第4子が生まれることと関係していたらしいということは、日記を時間順に読んでいだけでは分からない。おきくの妊娠に関することは、書状でコミュニケーションされたと考えざるを得ない。

さて、勝之助夫婦の第4子であるおりん（鑰）と真吾との間に、約3年4か月の間隔が開いているのは、すでに述べたような真吾の大病とおきくの問題が絡んでいるであろう。自ら栄養を制限した上に、口の中がはれ、さらに食欲まで失ってしまい疲労困憊し、一時は自分が死んでしまうことすら頭をよぎった〈柏，天14. 5. 2〉おきくである。その生理が変調を来しても不思議ではない。そのことを、勝之助は医者の説明として、「去年産後已来、月回一度も無之」と書いている〈柏，天14. 4. 12〉。

おりんは、生後わずか2か月で死んだ。次号で述べるが、最初から元気のない赤ん坊であったおりんは、おろくの背におぶわれたまま、痰を詰まらせてしまったのである。深い雪の中で葬儀を出し、他家の墓に葬る過程を記述する勝之助の筆は淡々としているが、哀切極まりなく胸を打つ。溢れ出る乳を吞んでくれとおきくが頼んでも、真吾は嫌がる。そうして、17か月の間隔で、第5子行三郎が生まれることとなる。

柏崎日記は、行三郎13か月のときで終わっているのだからその後のことはよく分からない。前記の系図によると、その後第6子おてつが生まれている。それは行三郎とは7年半以上も隔たった誕生である。その間に流産や死産があったのかも知れない。おてつを生んだ次の日におきくは数え年39で死んでいて、哀れである。分娩の次の日の死亡の原因は、もちろん分からない。1つの可能性は、出産のたびに問題になるおきくの「たらつき」癖である。それは、和漢三才図会第7にもある「血暈の

変症」のようなものであろう。おきくは、産後に目まいや身体のふるえがくること（血振）が多かった。あるいは、短命のものが多いた柏崎の渡部家に共通する病気が何かあったのかも知れない。

行三郎は4歳で死んだので、勝之助夫婦の6人の子どものうち、2人までが5歳以前に死んだことになる。それは歴史人口学的に見て（松田，1978；速水，1986）、当時としてとくに運が悪い方ではなかった（これらの研究は、農民を対象にした、過去帳（松田）、または宗門改帳プラス乳児死亡率の推定（速水）によったものである）。しかし、30歳を超えて生きたのは、表1にもあるように真吾1人であった。当時の農民と比較しても、勝之助の子どもには短命のものが多かったといわざるを得ない。

### 3. 子どもの発達と生育環境：1839-43

ここでは、2つの土地における勝之助夫婦の3人の子どもの（鑰之助、おろく、真吾）の発達と生育環境とを以下の17の項目に分けてまとめる。人間の発達とその生育環境とは、相互調整的な関係をもちつつ、ともに変化して行くものである（Bronfenbrenner, 1979）。項目の見出しは、子どもの発達に関するものであったり、子どもの取り扱い・生育環境に関するものであったりするが、それは便宜上のものであり、見出しのいかんにかかわらず、項目による程度の差異はあっても、発達と環境の両方に関係付けながら記述して行く。

また、方法のセクションでものべたように、子どもの発達に関する3つの領域はあくまで便宜上の区分にしか過ぎない。項目の2から8は、身体的領域と関係したものであるが、4や5は社会的・情緒的領域とも関連し、また8の遊びはどの領域とも関連をもつ。9から11は、知的発達の領域と主に関連し、12から16は、社会的・情緒的領域と主に関連する。また、1と17は、子どもの取り扱いに関する microsystem と mesosystem の特徴であるが、その背後に exosystem と macrosystem が作用しているのは当然のことである。

スペースの制限のため、このセクションの記述は極めて要約的なものにならざるを得なかった。より詳細な記述は、将来、別の形で出さざるを得ない。最初に桑柏日記の前半部分の分析の項目を示しておく。後半部分の分析で始めて現れる項目は、次の論文で述べる。

- 1) 生育に関する儀礼・慣習
- 2) 哺乳・離乳・食物
- 3) 排泄の訓練
- 4) 身体の手取り扱いと身辺の自立
- 5) 身体接触・共寝と愛着・同一視

- 6) 病気と医療
- 7) 移動と運動の発達
- 8) 遊び
- 9) 社会的反応と言語発達
- 10) 認知発達
- 11) 知的技能の獲得
- 12) 性的関心
- 13) 自己の発達
- 14) 養育者—子ども関係と社会的ネットワーク
- 15) きょうだい関係
- 16) 仲間関係
- 17) 行動統制ストラテジー

### 1) 生育に関する儀礼・慣習

出産の経過に関しては、おろくと真吾について記述があり、とくに後者の場合が詳しい。両方の場合とも取揚げ婆がきて分娩させるが、産後暫くしてからおきくが「たらつき」を起こし、真吾のときには医者も呼んだ。柏崎の取揚げ婆は、産後暫くは毎日来て、赤ん坊を湯に入れ、おしめまで洗うようになっていて、勝之助たちにとっては便利であった（礼は2朱）。

いずれの場合も、当日に出生の届けを奉行に出しており、また、柏崎での勝之助は2日後には早くも産穢御免の書類を受け取っている。また陣屋では、出産当日から祝いに押しかけてきた。そして、産婦と赤ん坊の世話のため、交替で陣屋内の女性が泊まり込んでくれた。

真吾の場合、出生当日は五香を与えられ、生後2日目にまず他の女性に頼んで乳を吞ませてもらい（多分、乳付け）、さらに別の女性によって哺乳されたが、3日目にはおきくの乳も十分に出るようになった。その日は「三つ目」であって、幸いに母子ともに大丈夫で、おろくの場合も真吾の場合も、世話してくれた人に食事を出している。乳付けは、おろくに乳を吞ませていたおきくもときどき頼まれて、生後2日目の男の赤ん坊に授乳していた（柏，天11. 2. 10；天12. 10. 18）。

本格的な祝いは、7日目の「七夜」で、子どもに命名するとともに、親戚、近隣の人や関係者を招いた宴が開かれた。なお、おろくはこの頃から夜泣きが始まり、あわび貝を屋根に上げたり、小夜の中山の夜泣き石のそばの土を水に入れ、その水をおろくに吞ませたりした。なお、1歳のときであるが、真吾にもあわび貝を用いている。

勝之助（数えで40歳）は、真吾を生後20日のとき（その日はおきくのおびや（産屋）明きでもあった）に家の前に捨て、お向かいの運八郎（真吾の系図によれば、おきくの従弟に当たる）に拾ってもらっている。大藤（1969）は、新潟県南魚沼郡では42歳でなく、41歳の2つ子をき

らうといている。確かに、勝之助が41になる天保14年には、真吾は2つとなるのであるから、土地の風習によってそうしたのかも知れない。柏崎は南魚沼郡とそう遠く離れてはいない。ついでながら、四十一の2つ子は、「世取り子とって、上に兄がいても家を相続するようになると信じられている」（大藤，1969，p.203）というが、渡部家では鎌之助が若くして死んだので、結果として真吾が家を継ぐこととなったのである。喰い初めは、おろくの場合には遅れて、7か月を過ぎてから簡素に行っている（柏，天10. 11. 15）。また、真吾の場合にも、それは7か月のときになされた（柏，天13. 11. 24）。かれの宮参りはその2か月ほど前である（柏，天13. 9. 27）。

さて、勝之助たちは、おろくの初節句はしないで内裏だけを机の上にも飾っておく積もりであった。しかしお向かいの竹内家の人々はそれを聞き入れず、自分の家の人形や道具類を持ち込んで飾ってしまう。さらに、祝いもいろいろもらい、結局、おこわを配ったり、人を招いたりということになってしまった。ところが、勝之助が宿直で、守りの女も使いに出した晩に、陣屋近くで火事があった。まず借り物の雛人形を片付けることから始めたおきくは、大あわてであった（柏，天11. 2. 29—3. 4）。真吾の初疋も省略したが、祝いを贈ってきたところがあって迷惑した（柏，天13. 5. 3）。

年齢は数え年で勘定したが、誕生日には鎌之助、おろく、真吾の場合、毎年内輪でかんたんに祝っていた。鎌之助の誕生日のことは、柏崎日記にも現れる。

勝之助は、おろくが数え年で3歳になった11月に、近く髪置きの祝いを形だけでもする積もりだと書いている（柏，天12. 11. 20）。それは、お向かいの事情（離婚話）で少し遅れて、12月11日に行われた。昼には子ども客を呼び、夜はおとなのパーティとなる。僅かの御馳走であったが、大勢が詰めかけ、おきくや手伝いの女たちは大骨折りする。しかし、するべきことを何とかして、勝之助たちは一安心する。一方、桑名では、一般の風習通りの11月15日に、「おろくの髪置じゃであかまんまをたき」、祝っていた。

鎌之助の成長過程でいちばん晴れがましい儀礼は、数えで5歳の年の誕生日に行われた袴着に当たる祝いである（桑，天11. 12. 8）。親戚からもらった古着ではあるが上下を着て刀を差し、八幡宮に参るとともに、昼は子ども客、夜は親戚、近所の人、世話になってきた人々を招いた宴が行われた。八幡宮での姿を見て、「親のない子ではないけれど、遠国隔て一目見せることもならず。それとも知らずあの元氣よく参りに行くことは」と後ろ姿をみておばばたちは涙ぐんだ。それに先立つ11月15日

には柏崎でも、祝いの気持ちでささやかな宴がもたれていた。翌年1月には勝之助が送った大小が桑名に着いた。

最後に、生育に関する儀礼とは直接には関係ないが、子どもの位置付けに関する興味あるエピソードを記しておく。それは、鐮之助が数え年で6つ〔満4：1〕になったときのことである〔桑，天12. 1. 23〕。庭に置いてあった薪や木っ端に鐮之助が小便をかけたので、平太夫はしたたか叱りつけた。その薪を捨てるわけにも行かない平太夫は、「七歳未滿之事故，井戸端へ持運び，水汲懸け，軒下へならべ……」というような処置を取った。小便をかけた薪をかまどで燃やしてはならないのであろうが、7歳前であるから、水で流せばかまどを汚すことにもならないだろうと平太夫は考えたと見える。まさに「七歳前は神の内」である。

## 2) 哺乳・離乳・食物

出生後の乳つけや、新生児期初期の授乳については、すでに1)で触れたので、それ以降の時期について述べることにする。子どもたちは長く乳を呑んでいただけではなく、乳がでなくなってからもそれをなめていた。おろくの出生までは母親の乳房を求めていた鐮之助は、目を覚ましたときや寝入るときに、おばばの乳を必要とし、それは4歳半頃まで続いた。しつこい鐮之助の要求をおばばは拒否できなかったが、折りをとらえて、止めさせる働きかけはしていた。たとえば、屋根に上がりたいという鐮之助に、「そんなら乳をやめ、晩からおじいさと寝るなら上がりやれ」というような条件をおばばは出す〔桑，天12. 5. 18〕。

おろくも乳好きで、母親の乳を長く呑んでいた。外で遊んでいても、家に駆け込んでおきくを呼び、乳を呑むとまた飛び出していく〔柏，天12. 5. 21；7. 29〕。おきくの乳が出なくなってから〔柏，天13. 1. 26〕も乳をなめることは暫く続くが、3歳にもなるとさすがに格好が悪くなり、「おかつちゃねむくなってきたぜ」といって寝ころび、暫く乳をなめるようになった。乳が出るかと聞かれると、おろくは「いっぱいこと出る」と喜んでいた〔柏，天13. 4. 7〕。しかし真吾が生まれて乳を呑み始めた当座こそは、少し羨ましそうであったが、すぐに、「ねんねが呑むのだからきたない」と自分で思い切る。そして、真吾が泣くと、乳を呑ませてやれと母親にいうようになった。そして、「真吾にやったのだ」と、おきくの乳房を触ることもやめた〔柏，天13. 9. 29〕。

鐮之助の場合には、おろくが生まれたことによる母親からの分離をうまく進めるためにおばばの乳は積極的な役割をもっていた。しかし鐮之助やおろくが乳をなめることをいつまでも要求することに対して、周囲のものは直接に拒否はしないが、望ましいことではないのだとい

うことを伝えるような否定的な態度を示すようになる。それは、「いつまでも乳をなめている自分」というマイナスの意味を帯びた自己像に導く。それが、子どもを乳房から離させるように働くのであろう。

乳は長く呑んでいるが、もちろん固形物も同時に食べている。たとえば、おろくは8か月で歯が生えると香のものを食い欠き、1歳2か月を過ぎると、そば、そうめん、おじやなど、いろいろのものを食べている。母乳の足りない8か月の真吾もがつがつし、10か月時にはみやげのまんじゅう2つをたべてしまった。また、1歳前からおじやを喜んで食べた。

また、鐮之助は毎日のように、そしておろくもときには、朝に目覚ましの食べ物が与えられた。鐮之助の場合は、夜に寝床でものを食べることもよくあった。すでに述べたように、間食に関して鐮之助が不自由することはなかったのに対して、おろくは十分には与えられなかった。真吾が生まれてからは乳をなめることもできず、空腹になると仕方なく一日に5、6度、おろくは1膳ずつ飯を食べた。手間がかかるけれども原因は分かっているので、勝之助は「実はむごき事に御座候」〔柏，天13. 5. 9〕と書き、平太夫も「……からだの為にはよかるふが……ほんにかわゆそう也」と同情している〔桑，天13. 7. 20〕。

食欲旺盛で珍しい食べ物に好奇心をもつ鐮之助は、エネルギー源だけでなく、かなりの量の蛋白質を取っていた。とくに、まぐろのさしみと鰻が好物であり、牛肉さえも食べて喜んだ〔桑，天10. 12. 9-12〕。上の平太夫の言葉からもわかるように、かれは子どもの成長には「おまんまを食べること」が重要であると信じていた。その影響を受けたのであろうか、痘瘡で療養中の鐮之助も「まぐろ位給んたってなんだ。こうことおまさまへ給てさへいれば死にはせんは」といった〔桑，天13. 10. 20〕。

桑柏日記に共通する特徴であるが、おとなたちは幼い子どもの飲酒を何ら問題視していない。鐮之助もおろくもよく酒を飲み、真っ赤になったり騒いだりしている。たとえば、鐮之助に鰻を料理してくれと頼まれた平太夫は、それをつけ焼きにしてやって、二人で残っていた酒を飲み、「鐮大よひ真っ赤になる」〔桑，天11. 8. 1〕といった具合である。おろくも1歳2か月のときに酒を飲み、真っ赤になり騒いだ〔柏，天11. 6. 9〕。

## 3) 排泄の訓練

子どもは生後間もなくからおしめ（むつき、しめし）をしていた。生後10週ほどにしかならないおろくを連れた（駕籠の中で抱いたり、単独で駕籠に乗せたり、あるいは抱いて歩いたりした）柏崎への旅は、今日から考えると大変なことである。しかし、勝之助夫婦は特別に苦

労なこととも受けとめていなかったようである。おしめについていうと、夜に宿で洗い、道中でも乾かしたらしい。それは、「今日はろくに日当り不申、むつき乾きかね宿にて干す」〈旅、天10. 6. 2〉といった記述（中山道、大井宿）から分かる。

さて、おろくと真吾の場合、排泄の訓練は現在よりもずっと早期に開始されており、おむつを相当早く取っている。おろく〔6；22〕は、夜もしつこのときは目覚めて泣くので、便所へ連れて行ってさせ、夜尿はあまりないとされている。しかしまだおしめが完全に取れたわけではない〈柏、天11. 1. 8〉。1歳4か月の時点では、夜尿はわざわざ書くほど稀になったのであろう〈柏、天11. 8. 25〉。その後もときには「ししばの無調法もする」〈柏、天11. 9. 22〉が、「八月頃よりししばは能く教ひ、無調法は致す事絶てなし。おきく仕合とてよろこび候」〈柏、天11. 12. 15〉〔1：8〕と報告している。おろくは2歳5か月で家の外で遊んでいるときにはしつこの自立ができ〈柏、天12. 9. 3〉、3歳3か月では、ふくことを除いて大便も一人で便所のできるようになった〈柏、天13. 6. 29〉。その後、「終になく今夜おろく寝小便たれ」たのは、真吾が生まれた後のことである〈柏、天13. 11. 5〉。

真吾の場合は早期から習慣付けていて、早くも生後7週過ぎのときに、「大小便ともやる度に致し候。二三日はむつきさっぱりよごし不申候」〈柏、天13. 6. 4〉と書かれている。そして、5か月過ぎには、夕方寝ているときに小便に何回も目覚めることとともに、尻癖がよいと次のように書いている。「真吾小便は些と油断すれば無調法致し候へども、夜分はめったになし。大便は十日に一度もむつきなどよごし洗ふ事なし」〈柏、天13. 9. 27〉。そして、次の年の「2月頃よりむつきはさっぱり片付置候」〈柏、天14. 5. 27〉ということになった。それは10か月の頃に当たる。結局、母親がよく気を付けていて、おむつを汚す前に排泄させるように心掛けていることと、それによって条件付けが成立して、排泄の前に子どもが目覚めるようになることが、早期に訓練が成功する原因であったといえよう。それが基礎にあると、言葉が話せるようになって、うまく予告できるようになる（おろくの場合、1歳3、4か月頃から）のである。幼い子どもにはいつも誰かがつきそっているからこそ、このような早期の訓練も可能となる。それは、エジコに入れて一人で置いておかれ、その中でたれ流しさせているのでは、とてもできない訓練である。

鏡之助の初期の訓練がどうであったかは分からない。5歳8、9か月のとき、夜長の時期に小便をちびったことがあるので、平太夫が寝るときに鏡之助を小便をさせるた

めに起こすことをしている〈桑、天13. 8. 21；10. 9〉。かれの場合、5歳でもまだ大便の後始末は、おとなに頼っていた。「えんこもふええぜ」と呼ぶのが4歳後半のことで、日記の話を小耳にはさんだおろくは、「桑名のアンチャが、おばぼうんこいへぜ、ふいてくんないていと、いへなるぜ」とお向かいの人に告げている〈柏、天12. 9. 26〉。

#### 4) 身体の取り扱いと身辺の自立

子どもの身体の取り扱いで重要な位置を占めたのが、月代（さかやき）を剃ることであった。おろくも真吾も生後間もなくから剃られていて、その後は頻繁に行われた。剃り手は勝之助が中心であったが、おろくは後にそれを嫌うようになり、大騒動となることが多かった。ときには「剃り賃」として、おろくにいもなどが与えられたり、お向かいの人が「褒め手」となって、なんとか剃ってしまうこともあったが、4歳の頃にはげんこつや、尻への平手打ちもよく用いられた。

鏡之助の場合の主たる剃り手は、平太夫であった。鏡之助にはいつものように剃り賃としての食べ物を与えられたが、かれの場合は月代を嫌がらず、きちんとした場所へ行くためには、月代が、そして後には髪を結ってもらうことが必要であると自覚して、むしろそれを頼むこともあり、問題はなかった。ついでながら、鏡之助は3歳6か月のときからちょんまげに結ってもらい、平太夫の真似をして髪をなでつけている〈桑、天11. 6. 30〉。どの子どもの場合にも、主たる剃り手のほかに、何人か代わりにしてくれる人がいた。鏡之助の場合、剃り賃は習慣化しており、7歳を超えてもそれをもらっていた。かれが細く真つすぐな薪をもってきて、剃り賃に杖を削ってくれと平太夫にねだったこともある〈桑、天14. 2. 23〉。

次に風呂について述べる。鏡之助は町の洗湯（銭湯）へ毎日のように行った。最初はおばば、平太夫に連れてもらっていたが、徐々に叔母や、親戚・知り合いの男性とも行くようになり、最後は友達とも行くようになって行く〔6：2〕。一方、柏崎でも、町の洗湯をよく利用した。相互に貰い湯もしたが、水を汲んでもらう手間や燃料のこともあって、あまり家の風呂はたてなかった。洗湯では、おろくが小さいときなどには、人手が必要であるが、お向かいの叔母さの援助があった。

洗面に関しては余り多くの記述がない。「手水つかひまま給べて出やれといふけれども……」〈柏、天12. 2. 14〉というような記述からは、おろくがどの程度洗面の自立ができていたかは分からない。鏡之助の場合には、平太夫と同じように塩で歯を磨き、顔を洗うことは、3歳半から出始め、5歳頃には、平太夫との同一視とも関

係して、よく書かれている。

着衣の自立について、おろくがどうであったかはよく分らない。ただ、鎌之助の場合その自立は遅く、たとえば、6歳を相当過ぎてからも、朝に付けひもと帯を平太夫に締めてもらっている。

#### 5) 身体接触・共寝と愛着・同一視

子どもは出生直後から母親と共寝しているし、また、ごく小さい頃から人に抱かれたりおんぶされたりしていた。真吾の場合、生まれた当日からおろくに抱かせ、また、お向かいの人が抱いたり、おきくと勝之助が懐に入れたりしている。そして、生後3週間では早くもお向かいのおたみ(7歳位)がおぶって外出している。

寒いときなどによく、小さい子どもを懐に入れた。また、肌におぶい手の着物の下に入れて)おぶうことは相当後までしている。それは女性のすることで、平太夫が鎌之助に一度して笑われたことがあった。もっとも勝之助も家の中では真吾を肌におぶって朝起きることもあった<柏, 天14. 閏9. 29>。普通のおんぶは、子どもが相当大きくなってからもしている。平太夫が鎌之助と近所の仲間の熊市を連れて魚取りに行った帰りのことである。熊市に「これは貴様弱いふ。おら何ともない。これ見やへ」と足が強いのを誇った鎌之助であった<桑, 天13. 9. 16>。しかし、その2月ほど後には、叔母に負われて遊んでいるところを平太夫に見られて、「大きいなりしておばれて何のこった」といわれている。それは、もう1月余りで鎌之助が6歳になるときであった。

さて次に、わが国の子育てと関係してよく論じられる共寝(co-sleeping)について述べる。ここでは、とくに子どもの愛着対象という視点から分析する。

**鎌之助の共寝の相手の変化** すでに述べたように、鎌之助の場合には、母親からの分離を促進するために、おばばの乳をなめ、一緒に寝るように図られて、それはうまく行った[2:3]。鎌之助が接触するおとなの範囲はその後も広がって行くが、「ねおきとねむけのきたときは、おばばでなくてはならず」<桑, 天11. 4. 11>というように、おばばへの愛着が優勢である。

次の段階は、共寝の相手が平太夫へと変わる移行期である。当初は自分と寝ないかと平太夫が誘ったりおばばがそれを示唆することが続く。その次には、鎌之助が昼間には「おじいさんと寝る」とおまいすをかくようになるが、実際に寝る段になるとおばばと寝るという状態が暫く続く。やがて、鎌之助はときどき平太夫と寝るようになるが、具合の悪いときはおばばの方へ行く。

そして4歳台も終わりに近づくと、鎌之助の選ぶ対象が、平太夫の方に大きく傾くようになって来るが、その過程で、女性について「おかんこくさい」などと理屈付

けがなされる<桑, 天12. 12. 16>。5歳前後のときには、平太夫に対する愛着が高まり、一緒に寝ることや昼間に平太夫が家にいることが嬉しくてたまらない様子がよく見られた<桑, 天12. 11. 19; 天12. 12. 28>。それとともに、なんでも平太夫と同じようにするという同一視の現れがよく見られるようになって行く<桑, 天13. 2. 13; 天13. 6. 22>。ところで、鎌之助が平太夫と寝ることを喜び、「おじいさん寝なんか」とさそっても、事情によって希望が叶えられないこともときにはある。そのような状況の経験(平太夫は納得できるように説明することが多かった)を通して、鎌之助は次第に今晚は無理らしいと分かるようになり、一人で寝ることになる。そのため、平太夫と一緒に寝られるときは一層喜びが増すのであった<桑, 天14. 3. 2; 天14. 12. 16>。

以上の移行より時期は少し後にずれるが、鎌之助が外泊できるようになる過程も、類似の経過を辿る。すなわち、親戚で泊まれといわれて、自分でも昼間は泊まるといいうが、いざとなればだめな時期が続き、ついに他家で泊まれるようになって行く。最終的な移行の状態<桑, 天13. 8. 11>を経て、自分でしっかりその積もりになって、佐藤へ泊まりに行くのである<桑, 天13. 9. 25>。平太夫夫婦にとっても初めての分離経験を、平太夫は次のように記している。「鎌之助留守にて火の消えた様。夜前は甚淋しく何か物足らぬ様にて手持不沙汰。今頃はどふしたやら、もしや目を覚まし泣きはせまへかなどと案じろくにねふらずに起きる」。そのとき鎌之助は5歳9か月であった。

**おろくの共寝の相手の変化** 一方おろくの場合はどうであったろうか。彼女はもちろん若干の例外の日を除いて、最初からおきくと寝ていた。2歳7か月過ぎに、母親に「晩にだへてねん」といわれても、「おとっさとねるからいへもんだ」と平気であったり<柏, 天12. 11. 9>、また、夜間に吐いた後で勝之助の寝床に来ることもあった<柏, 天12. 12. 20>。しかし、この後の場合でも、朝に目覚めると母親の所へ逃げて行っていた。そのおろくが初めてお向かいで泊まったのは、次の年の1月である。お向かいの叔母さんと悠之助が帰ろうとすると、おろくが激しく泣きだすので、「そんならば、おらんとこへ泊まりにくるか」、「あい」と、おぶわれて行き、そのまま帰って来なかった<柏, 天13. 1. 14>。

おろくは真吾が生まれてから5日間お向かいで寝て、父親には「一向つき不申」、勝之助は困惑した<柏, 天13. 4. 15>。そこで、おろくを真吾と一緒に寝かせ、後で勝之助が入れ替わり、朝にはまた真吾に入れ替えておくという方法を使った。勝之助が宿直の夜には、おろくを寝つかすのに真吾を使い、後はおろく一人で寝させ

たこともある。ある日、おろくを叱ったおきくがうっかりと、「もう晩から家へ寝せぬ」といったら、「そんならお向かいへ行くからいへは」といって、おろくは泊まりに行ってしまう<柏, 天13. 5. 11>。勝之助が宿直のときも、家を出るときには「御役所に泊まってくる」といっていても、役所で弁当を食べ終わると、おろくはさっさと帰ってしまう状態が続いた<柏, 天13. 5. 5>。また、家では、その年の8月になっても9月になっても、おろくは父親と寝たがらない。

9月の終わりになって、おろくの様子に少し変化が見え始めた。10月後半からは、父親と寝たり、また母親と寝ることを求めたりしていたが、11月に入って暫くすると、家では勝之助と寝るし、役所にも泊まるようになって、漸くおとなの望むような形に落ち着いたのである。その結末を、勝之助は次のように書いている。「此頃はおきくを思ひ切り候や、私と寝る事を殊之外悦び申候。乍去更宵から抱かれて寝よふと申、是には難有迷惑也」<柏, 天13. 11. 18>。日頃から、おろくの相手をかなりしていた勝之助であったが、おろくの共寝の相手としておきくに取って代わるには、半年もの持続的な働きかけと、おろくの内部での変化が必要であった。その経過は鏝之助の場合と類似しているが、柏崎では早い移行が要求されていたので、おろくへの心理的圧力も強かったと思われる。

#### 6) 病氣と医療

すでに述べたように、少なくとも日記の記録が始まってから、鏝之助は健康に恵まれていた。もちろんかれも風邪にかかったり、熱を出したり、下痢をすることはある。しかしたいへいの場合は、家に備えてある市販の薬（救命丸、一角丸など）をのませ、寝させているうちに治ってしまう。さすがに疱瘡のときには、予期はしていたものの、おきょうのこともあるので（15参照）、平太夫はすぐに医者を呼びにやらせる。平太夫は、発病の7か月ほど前に、疱瘡洗いの薬を煎じて鏝之助の全身を洗ってやっており、また、まじないもするなど、疱瘡に対処する構えができていた。そして、幸いにも鏝之助の疱瘡も軽かったので、疱瘡の治療と、それと結び付く社会的儀礼も、うまく経過したのである。この過程に関しては、筆者の視点とは異なるが、すでに、本田（1982）や皆川（1982）の考察がある。

しかし、鏝之助に関しては、平太夫・おばばが何の不安ももたなかったのではない。鏝之助が風邪などで熱を出したときに、「晩にころりと死んだら……」という考えがおばばの頭をよぎり、案じることもあった<桑, 天14. 9. 9>。実際、当時の人は現在よりもはるかに多くの死を見聞している。鏝之助も、平太夫が食物を喉に詰

まらせたときには背中をたたき、「おじいさ、死なんけりゃいいが」と案じたのである<桑, 天14. 閏9. 29>。

一方柏崎でも、本家と同じ富山の薬売りが、一角丸、萬金丹などを置いており<柏, 天11. 5. 14>、いざとなれば、陣屋や近所から薬を回してもらうこともできた。そして、病気になるば頻りに医者に見せ、半年ごとの支払も相当額に上っていた。それにもかかわらず、おきくや真吾の病氣に対する医療は、はかばかしい効果を示さなかった。勝之助は、頼りなく、また相互に仲の悪い医者について、日記の中でこぼしている。それでも病氣になったときには、第一に医者に頼らざるを得なかったのである。医者にかかることもままならない地方や階層の人々と比べると、勝之助たちは少くとも心理的水準では、幸せであったのかも知れない。

平太夫が送ってきた疱瘡洗いの薬の処方箋が、効果をもったのかどうかは別にして、おろくも真吾も疱瘡は軽くて済んだ。しかし、真吾の胎毒の経過は極めて悪く、すでに述べたように、勝之助一家に大きくのしかかったのである。これについても、皆川（1982）の考察がある。真吾の病氣がどのようにして最終的によくなったのかはわからない。なぜなら、それはちょうど天保14年秋のことで、柏崎日記のその部分が欠けているからである。勝之助が江戸から帰ってきたときには真吾の状態もよく、活発になってきていた。「漸く本とふの子どもらしく相成申候」と勝之助は安堵したのである<柏, 天14. 閏9. 29>。

#### 7) 移動と運動の発達

子どもの身体的発育は、平太夫たちも勝之助たちも関心を寄せたテーマであった。かれらは、よく子どもの手形や、身長などを表す寸尺を交換し、子どもの相互比較を行った。おろくは初期から大型のなりをしており、2歳以上年齢の違う鏝之助をある次元では凌駕する時期すらあった。しかし、鏝之助も順調に発育し、勝之助は自分より大男になるだろうと喜んだ。日記から得られる情報が、子ども間の相互比較に止まるのは残念である。身体に関する具体的な数値として、一回鏝之助の体重が記録されている。それは、かれが5歳3か月のときのこと、4貫700匁（17.6kg）であった<桑, 天13. 3. 22>。

運動と移動の能力の発達については、手による物の操作、坐る、這う、立つ、歩くなどの開始に勝之助は関心を寄せている。早期の内から、まだ這うことも坐ることもできないなどと書いていて、次に出てくるであろう行動を予期している<柏, 天10. 8. 22>。また、勝之助は下駄や草履で歩く、階段を上るなども記述している。一方、平太夫の方は、鏝之助が年長になっていることもあって、鏝之助が飛んだり走りまわったりするのを「危

なくて、どうもならんじゃ」とこぼしている。だんだんと高いたかし（現在の竹馬）に鑢之助〔4：10〕が乗れるようになって行く過程でも、「あぶなくてならんじゃ」と書いている。

おろくと真吾（1：9まで）の行動発達の時期を以下に示す（おろく、真吾の順に週齢で示す）。－は明確でないものを示し、括弧は筆者の推測によることを示す。

手が利いてくる： 21 22；坐　　る： （28）50

這　　う： （38）43 54；つかまり立ち：46 82

ひとり立ち： 52 84；歩き始め： 54 91

歩行が安定： 61 未；2階に上がる：61 未

おろくの這うのが遅いのは厚着のせいである。そして、真吾の発達全般が遅れている最大の理由は、0から1歳台にかけての大病である。真吾は這い始めても力がなく、2、3尺で切なかり、1間ほど這えるようになるのは、その後2週間近くたってからである。そして、今回の分析対象とした期間の最後に、漸く2歩ほど歩いたのである。

## 8) 遊　　び

今回の分析対象とした期間中での鑢之助とおろくの生活の中心をなすのは遊びであり、それはとくに鑢之助で目立つ。かれがした多様な遊びを、この限られたスペースで記述することはとてもできない。ここではごくかんたんに、主な遊びとその特徴を述べるに止めておく。

鑢之助の遊びの中心をなすのは、その内容は運動能力の発達とともに変わるが、道具を使った身体を動かす活動であった。太鼓、竹馬（馬頭と車をつけた1本の竹または棒）は幼いときからできる。とくに太鼓は石取り祭りを中心によくたたかれるという環境もあって、鑢之助は外や家でしきりにたたいた。藩主やその近親者の不幸があり、大きい物音をたてることも禁じられる（穩便触れ）ときや、近所に不幸があったときなどには、太鼓は禁じられるが、鑢之助はそれをよく了解して、禁止が解けるのを待つことができた。そして、「おばばおばば、あのせみが大きなこへしてなくに、おんびんだにしかられやふぞ」と鑢之助〔4：6〕がいったのには、皆が大笑いした。そのほかに、紙鉄砲；くい打ち、こま、花火、のろし、吹筒、弓、たかし（高足）……と多様な遊びが見られたが、なんといっても鑢之助が打ち込んだのは、凧と釣りであった。かれは、ほんとうに凧好きであり、また、「殺生好き」の子どもであった。

これらの遊びのためには、遊び道具をこしらえたり修理したりし、あるいは、凧の場合のように、鑢之助が幼いときには手伝ってやるおとなが必要であった。鑢之助は、平太夫をはじめ周囲のおとなをねだり倒して、要求を叶えるのであった。近所の子どもが、何かの遊びをすると、このねだりは「たった今こしらってくんへ」と

激しくなる。しかし、せつかく平太夫に作ってもらったたかしではあったが、5歳にならぬ鑢之助には無理であった。乗りたくて仕方がない鑢之助のために、平太夫はすぐに木と観世よりで鑢之助を満足させる似た道具を作った<桑, 天12. 8. 26>。

このように、鑢之助が幼いときは、周囲のものはよくその無理を聞いてやっていた。しかし鑢之助が年長になってくると、少し事情が変わる。鑢之助がひとりでは上げられない大凧を上げてもらおうと、あちこち交渉しても、思うようにならないこともでてくる。しつこく要求する自分のことを、「そりゃまた責め道具がきた」と佐藤家でいわれると、そこは諦めざるを得なかった<桑, 天14. 2. 22>。凧のシーズンが終わると鑢之助は釣りに熱中する。それには平太夫もあきれて、かつ諦めているが、勝之助は日記のなかで、鑢之助の殺生好きを少し心配している。

そのほか、近くの山や川、祭りや見せ物、遠方の海や神社などあちこちに鑢之助は連れていってもらっている。そしてそれに、仲間と一緒におとなに連れてもらったり、近くなら、子どもだけで出かけるという形も加わってきて、だんだん自立性が高まってくるのである。

おろくの場合は、5か月になる前からものを与えておくによくひとり遊びをしていること、鑢之助と同じくさせるをなめるのが好きなこと〔30週〕、そして、家やお向かいの障子を破ること〔1：0〕、家の中で水をまき散らし、くどの灰をつかむなど〔1：4〕、活動的であることが、よく書かれている。一方で、認知発達とも関係して、「自分の枕を見るとむねに抱ひ、ねんねんころころのまねいたし、なかなかこしゃく」なものだと、勝之助は書いている<柏, 天11. 5. 4>。そしてそれは、2歳台のねねさま（ののさま）遊びへとつながっていく。

このあたりから、おろくの遊びは鑢之助の場合と異なったコースを取る。おろくもおもちゃをもっており、また、外で子守や仲間と長い時間を過ごす、ままごとの類の他はその内容はあまり明確ではない。しかし少なくとも鑢之助のような多様な道具を使ったダイナミックな遊びではない。鑢之助の場合と違って、相手になってくれる有能なおとなが得られないこともあろうが、興味・活動の性別化の過程が始まっていることが、違いを生みだす大きな原因であろう。しかし、勝之助たちもおろくを連れて出るとは多い。寺、山や野原、浜などへ連れられるとともに、祭り、花火、行事などの見物にも行っている。そのように、おろくを楽しませることはできるだけしているし、寝床などで昔話を聞かせたこともある。

## 9) 社会的反応と言語発達

勝之助は子どもの社会的コミュニケーションの能力の

発達には興味をもって、真吾がまだ6週過ぎのときに、「無程五十日になり候へども、まだ小坊主わらひ不申候」と書き、約1週間後に、「一両日ちとわらひ出し候」と記録している<柏, 天13. 6. 4>。

次の段階になると、コミュニケーションを可能にする明確な単語の獲得に関心が向けられる。おろくについては、1歳から1歳2か月頃に、ものいうことができず、「むまむまばあ」ばかりだとか、まだいっこうに口がきかれず、「かか」もいえず、ただ「ねんね」と「ばあ、むまむま」ばかりだとか書いている。真吾については1歳8か月のときでも、「まだ何もいふことならず」<柏, 天14. 12. 12>と記している。そのときの真吾は、痛みを訴える「いたへいたへ」や、飯のお代わりがほしいときに「かいゝゝゝ」といっているのであるが、それは、ものをいっているうちには入れていないのである。

そして、おろくの場合には、返事をし、「かか」がいえ<柏, 天11. 6. 19>、何か話をする心持ちが出てきたようだとしてる段階<柏, 天11. 8. 30>を経て、2か月足らずのうちに大分口がまわるようになり、「ちゃちゃ、かか、おばば、しょんべ、うんて、まめ、とと」その他の「かたこと」ができるとしている[1: 6]。そして、その2週足らず後には、3語連鎖ともいえるようなものを記している<柏, 天11. 11. 10>。「ととにゃあにゃあ、ええ」というのは、遊びにきている猫に、巻藁からいわしの焼き干しを取ってやれということであった。一般的にいて、おろくの初期の言語発達はやや早いと思われる。しかし、言葉が出てからの発達が急速に見えるのは、おとなにも明確に聞き取れる発語という基準が高いので、言葉の出現が遅く記録されているからであろう。

その後のおろくや、2歳2か月以降の鏡之助の言語発達のコースを記述する余裕がここにはない。随所に引用した子どもたちの発言を、その見本の代わりとする。とくに桑名日記には、鏡之助と平太夫、あるいはおばばの対話が、そのままに近い形で多く記録されている。また、数はそう多くないが、柏崎日記には子どもが見えてきたことを、後で親にどのように報告するかが記されているので、これらの資料の分析から興味深い知見が得られるであろう。

#### 10) 認知発達

鏡之助の認知発達に関しては、かなりの量の記述がある。平太夫だけでなく、おばばも鋭い観察者であるとともに、鏡之助が利口すぎると心配もしている。それは鏡之助[3: 7]が余りおばばをいじるので、おばばが、「いやもふうるさいぞうるさいぞ。そのよふにおばばいじって、おばばがしんだらどぶする」というと、「おば

ばがしになったらどうしよう」と鏡之助が泣き出したときに、おばばが案じたのである。これは、敏感過ぎるといふ心配であるが、そのほかにも、おばばや平太夫、そしてときには、日記のその記述を読んだ勝之助をも感心させるエピソードがいくつもある。たとえば、たんすの上のものを取るのに、足継ぎになるものを持ち出している[3: 4]。また、鏡之助[4: 7]が、前の年に作ってもらった舟のおもちゃを出し、板きれを持ってきて、平太夫に仕方を示して、舟の後の方に付けてくれと頼んだことがあった。舵という言葉は知らないが、「いつの間に見た事やら、目かどのつよい小僧だと、おばばかんしんする」<桑, 天12. 7. 4>。

5歳前後になると、鏡之助が、論理や推理でおとなの矛盾や非一貫性を指摘するエピソードが、いくつか出てくる。以下に平太夫と鏡之助の寝る前の対話の例を示す<桑, 天12. 11. 20>:「おじいさ、あすは御蔵かへ。「いや御蔵でなへ。いや御蔵だ。「こりゃいやらしい。御蔵でなへていっ(虫)、また御蔵だといひなる。そんならねへ、あしたはおかへかおままかへ。「おかいさ。「それ見みない。御蔵のときはおままだのに、おかへだから御蔵でなへ。そんなら米をたして、おままにせぎなるまへ」。そのほか、平太夫が「ご家中残らず」といった後で、鏡之助[5: 0]が個々の例を尋ねて、例外があることが分かった、「こりゃいやらしい。いまご家中残らずと言ったでなへか」と指摘し、「一本入れられたには困ったり」と平太夫が書いている<桑, 天12. 12. 11>。

おろくに関しては、言語理解や模倣と関係した記述が初期に多い。たとえば、「ちょちちょち」や、「かぶかぶ」の芸を教えるとよく覚えたのは、ちょうど7か月の頃である。発達心理学から見て面白いのは、目の前にないモデルの行動を再現して見せる延滞模倣で、まだ13か月にならないときのことである。おろくが着物をまくって、2本指で何かつまむ真似をしては口に入れる動作を何回もする。不思議なのでよくよく考えると、それはしらみを取る真似であった。おゆきが連れていった先で見たか、あるいは、おゆきがするのを見ていたか、「まずこれに違いなし。みなみなふしぎ又大笑い也」<柏, 天11. 4. 25>。この日の日記を勝之助は、おろくも真似が上手な「ひょうげもの」になると見ると結んでいる。このように、今日われわれが認知発達の指標と考える行動を、社会性と結び付けて考えていることは興味深い。

#### 11) 知的技能の獲得

鏡之助の場合、この領域での訓練が本格的に始まるのは、満で7歳が近づく頃であった。4歳前の遊び的なもの<桑, 天11. 12. 18>は別にしても、平太夫は鏡之助が5歳の頃から、オーラルな模倣(空読み)をぼつぼ



つさせているし<桑, 天12. 11. 24; 天12. 12. 18>, 6歳の前半には、寝床で掛け算や割り算の九九をいわせたりしている。また、6歳3か月のときから、叔父の佐藤留五郎(おきくの兄)に頼んで、「下習い」として手習いの予備的学習を始めている。しかし、数字が書けるようになったことが分かって<桑, 天14. 7. 4>, 積極的に教え始めることはしない。暫くすると、鏡之助は数字も「いろは」もさっぱり忘れてしまう[6:8]。反復練習をしないからであろう。このときには、さすがに平太夫もおばばも鏡之助を責め、佐藤の家に手本を見にやらせた。しかしこの時期での平太夫は、鏡之助に年齢相応の学習の機会を与えて行き、その発達的变化を見守り、学習の成果には関心を向けてやるという姿勢で一貫しており、それ以上に急がせたり押しやったりはしない。

7歳近くになって、ようやく平太夫の姿勢に変化が見られ積極的に学習を励ますようになってくる。清書の出来栄に関心をもったり[6:10]、叔父の家に手習いに行くときに、「よく習って来るのだぞ」と励ましたり[6:10]、親戚の学者からもらった「大学」を読ませたりし始める[6:11]。それは正月を迎えると、鏡之助が数えでもう9歳になるときであった。

一方おろくに関しては、9)と10)で触れたような初期の一般的な知的発達には勝之助も関心をもっている。しかし、5歳までのこの時期には、読みのような知的な技能の獲得に何の関心も親がもたなくても不思議ではない。そのような年齢の要因のほかに、後には、性別も関与してくるのである。次の論文で述べることであるが、知的技能の学習に関しては、おろくよりも、3歳年下の真吾に力点が置かれるようになるのである。

## 12) 性的関心

鏡之助の場合、本人が性的な関心をもつところまでは至っていない。しかし、平太夫やおばば、あるいは親戚のものが、わざわざ教えることはないが、鏡之助はおとなたちとの接触から、いろいろの性的な言葉や知識を学ぶ。その大部分は、鏡之助自身が理解できないことである。しかし、次項で触れるように、自分の身体に関したことがらは、全然理解できないままの発言とはいえないであろう。そのような鏡之助の言動を、おとなたちは面白がり、平太夫だけでなくおばばすら、笑うばかりで禁止することはない。鏡之助が知っている女性に卑猥なからかいの言葉(大口)を投げかけて、相手を当惑させることも何回かあったが、平太夫の態度は許容的である。いくつかの例を挙げよう。

鰻を骨ごと食べた鏡之助[3:6]は、「おれはうなぎをたべたから、ちんぼがながくなるだろう。ちんぼが大きくなるとおやまかいにゆくじゃ」といった。また、

4歳のとき、正月で家が賑やかなので鏡之助ははしゃいで、着物の前をめくってちんぼのご開帳をした。鏡之助の指示に従って、おとな(男女)が順に少し離れた所から、「これはええちんぼ。えらいものじゃ、でらぶつじゃ」と褒めると、鏡之助はたいそううれしがった<桑, 天12. 1. 3>。「おめこ、おかんこ、へのこ、ちんぼ」などが鏡之助の口について困るので、平太夫が灸をすえてやるぞと脅すと、一時は「ごめんだ、ごめんだ」とあやまるが、すぐに大口をきく<桑, 天12. 4. 23>。さらに、数え年で六つの鏡之助は、義理の叔母に当たる女性にも、「新地の焼けぼぼがきたか」といって返答に困らせたこともあり[4:7]、平太夫は「七つ八つはにくまれさかりといふけれど、もはやそろそろにくまれ口をきく」と書いている。これらのことが望ましいことではないことは当然に認識されているが、完全にやめさせることは困難だとして、平太夫もお手上げの風である。

「このまったけ風は、茶臼風が吹くときでなくてはあがらんと皆がいいなつたぜ」という鏡之助に、どのように吹く風かを説明させておばばがおかしがった<桑, 天13. 1. 29>エピソードや、「これ見なへ。狸汁喰って来たからきん玉が大きくなった」と見せたのに、大笑いする話<桑, 天14. 11. 6>などは、無邪気な子どもの言葉を慰みとするおとなの態度をよく反映している。

一方、おろくの場合には、鏡之助よりずっと目立たないが、類似した環境に置かれていたと思われる。嫁は何にするんだと問われたおろくは、笑いながら「抱へて寝るんだ」という。それに対する反応は、「誠に大わらひいたし候。だれがきかせるやら、こしゃくには困り申候」と、許容的である<柏, 天12. 11. 7>。おろくが笑いながら答えているのは、そのようなことを教えたおとなが、おろくの言葉で笑ったので、家のものも笑うことを予期してのものと考えられる。その他にもおろくは、嫁に大根をおつける風習に触れたり、卑猥な風刺の唄を意味もよく分からずに覚えたりしている。

## 13) 自己の発達

鏡之助もおろくも、対象化された自分の姿やその評価に対する関心が早くから芽生えている。それには、子どもがいろいろの対人的相互作用をもち、そこでの他者の反応に影響されることが関係しているように思われる。

小便がたくさん出るなといわれて、「おれのちんぼが大きいから……」といたり<桑, 天10. 12. 4>、「おれは歯がつよいから」一番かたい菓子を買ってくれとねだる<桑, 天11. 4. 8>など、鏡之助は身体についてプラスのイメージをもっている。何人ものおとなに、器量がよいとほめられる鏡之助は、自分で鏡をのぞいて、目が大きいと感心したり、また、騒いで餅を踏んでそれが足に付く

と、「おれはきりょうがええから、もちがほれてあしのうらへひつついた」などといい抜ける<桑, 天11. 12. 25>。かれはまた、「おばば、おれりこふかばかか」と尋ねる<桑, 天11. 7. 9>。そして鏡之助は、「おじいさのちちをのむとつよくなる」、「おばばのちちをのむとよくなる」といったり<同日>、また、平太夫に汁かけ飯の早食い競争を挑み、「勝った勝った」とうれしがる<桑, 天13. 4. 12>。これらは、現実吟味をしたり、自己についての理論化をしながら、鏡之助が自己概念を形成して行く姿を示している。

鏡之助がもつプラスの自己概念は、かれを取り巻くおとなによって支持されている。したがって、3, 4歳の鏡之助が、マイナスの自己評価をしたり、周囲との葛藤のために反抗的になったりすることは、ほとんど認められない。鏡之助が強く要求し続けられれば、たいていのことは叶えられたのである。しかし同時に鏡之助は、おとなのやりとりを通して、いろいろの要求充足に関して、自分が周囲のおとなに依存していることを自覚している。それが、鏡之助がかれを取り巻く人間的環境との間に、大きな葛藤がなかった1つの原因であると考えられる。

それに対して、おろくの場合は、3歳までは家族の中の一人っ子的な位置を占めていて、精神的にも安定していた。しかし、甘えたり、聞き分けがないおろくのことを、両親はやや困ったものと見ていた。医者呼んだときに、大柄のおろく〔2:10〕がだだをこねるので、不思議に思ったのか医者が年齢を尋ねた。体格から、六つだと思っていた医者がびっくりしているには、「……御四つなら御もっとも。ただ今がいっちおむつかしきところでござります」<柏, 天13. 2. 4>。しかも、その後に弟が生まれ、しかも弟の病気に母親がかかり切りとなり、しかも母親自身の身体も不調であったことが、おろくの適応上の困難を引き起こした。ちょっとしたことでめろめろと泣いたり、あるいはだだをこねるおろくに両親は困り、おきくも、だから女の子は面倒で育てにくく、いやだといったりする<柏, 天13. 9. 2>。

この間にもおろくの自己意識の発達が見られる。ある日、相変らず月代を嫌がるおろくに、勝之助が男まげのように結い、元服したように剃ってやると、おろくは大喜びで出ていった。しかし、おかしいとお向かいでもさんざん笑われたおろくは、「そんならおばばさ剃ってくんへ」と自分から頼み、きれいに剃ってもらった<柏, 天13. 12. 24>。

鏡之助の自己概念の形成に関与することとして、「町人とは違う侍の子ども」という意識をもたせるような意図的な働きかけが一応は見られることを述べておこう。3歳9か月の鏡之助が、長吉の真似をして遊びたいといっ

たときに、おばばは「家中のものは町のものまねなんぞするものでなへ」という。「それでも金山のてつさがしなつたもの」といったのに対して、「そふ、おばばのいふことをきかぬと、御馬にのせて越後へやって、おろくをつれてきておばばがだいてねる」といわれた鏡之助は大声で泣いた<桑, 天11. 10. 4>。このときは、おばばの言葉の内容よりも、自分を拒否しようとしている調子が不安を引き起こしたのであろう。その後も、「家中のものが、火消の真似なんぞするものでなへ」<桑, 天11. 10. 27>とか、「こまなんぞは町の者の廻すものだし、弓は御さふらひの射るものだ」<桑, 天13. 10. 18>と祖父母がいて聞かせている。通常は、極めて許容的な2人であるが、鏡之助がそこからはみ出しそうになると、階級意識が持出されるのである。

一方おろくに対しては、階級も性別も強調されない。大柄で男顔のおろくに、男装させれば似合うだろうと考えたり、上記のように、冗談で男まげに結ったりしたのである。それにはおろくがまだ幼児期にあるということのほか、女兒であることも関係していよう。性別化への圧力は、女兒よりも男児で、より早期にかかってくると考えられるのである。

#### 14) 養育者—子ども関係と社会的ネットワーク

鏡之助、おろくと真吾の直接の養育者である、平太夫夫婦と勝之助夫婦と子どもとの関係については、こままでの項目(17)で述べてある。ここでは、かれら以外に、子どもたちと深くかかわったおとなについて、かんたんに触れておく。

すでに述べたように、鏡之助は多くのおとなと関係をもちながら育って行った。鏡之助の主な愛着の対象は、5)でものべたように、おばばと平太夫であったが、ともに得られないときには、平太夫の末娘で未婚であったおなかや、平太夫の既婚の娘たちが、一時的に代理の役割を果たした。それに、鏡之助からの愛着は別にしても、佐藤家や片山家には、鏡之助を深く可愛がった老人たちがいた。これらの老人は、鏡之助に会えると大喜びで、鏡之助は暖かい雰囲気の中に囲まれて育ったのである。

そのような、愛着関係のほか、鏡之助を取り巻くおとなは、鏡之助をあちこちへ連れて行ったり、相手になったり、遊び道具を作ってくれたり、そして、手習いの手ほどきをしてくれた。これらは、渡部家の親戚の男性を中心としたもので、佐藤留五郎をその代表者に挙げることができる。かれは、日頃から渡部家に入出入りしており、鏡之助とは多くの面での接触があった。その役割は、まさに鏡之助の mentor ともいえ、その発達の意味は大きい。このような役割は、平太夫も大いに果たしたことはいうまでもない。しかし、平太夫ができないときに、い

ろいろのことを頼める安定した人がいることは、鎌之助の社会的ネットワークのシステムにとって、意味が大きい。平太夫としても、安心して孫を委ねることができる対象があることは、かれ自身が行う子育てにもプラスとなる。このようにして鎌之助は、自分を取り巻くおとなをうまく活用して、生活して行ったのである。

一方おろくの場合はどうであったろうか。愛着の対象としては、何人も入れ替わった子守のうちで、とくにおゆきを挙げることができる。彼女が実際に子守として務めたのは短期間であった。しかし、おろくはすぐになつき、おきくもよい子守だと評価した。そして、家庭の事情により子守をやめてからも、おゆきは渡部家によく出入りした。おゆきもその母親も、おろくをほんとうに可愛がるし、おゆきの婿も渡部家に入出入りするなど、安定した関係が、維持されたのである。

お向かいの竹内家の叔母さ（ときには、おばばとも呼ばれている）も、おろくとの愛着関係で忘れることができない。とくに、勝之助一家が、真吾とおきくの病気で困難に陥ったときに、おろくを深く可愛がる叔母さを中心とした竹内家の支援体制は、3、4歳頃のおろくを救う大きな力となったのである。好人物である息子の運八郎たちも、おろく、そして真吾の世話をよくしてくれた。とくにおろくの場合、相手をしたり、外に連れ出してくれる人がお向かいにいることは、その社会的世界にとって、重要な意味をもったといえる。

真吾の場合は、病気がちで専ら母親の世話を受けていたから、1歳9か月までの時点では、その社会的世界は限られていた。しかし、父親やおろくのほかに、おさとという僅か数え年11歳の子守が、一時期ではあったが真吾の守りとしてよく務めてくれ、勝之助夫婦も喜んだのである。

#### 15) きょうだい関係

鎌之助は直接の相互作用を通したきょうだい関係をほとんど経験しなかった。おろく出生の前日までは、鎌之助は目覚めたときなどとくに母親の乳を求めていた。しかし、おろくの産声を、「あれはねんねの声」と教えられた鎌之助は、「猫様だねえ」で済んでしまい、母親のそばには寄らず、おばばの方に付くようになって、周囲の者を安心させた。おろくが、両親とともに柏崎へ出発するまでに、鎌之助が妹に関心を向けることはあったかも知れない。しかし、桑名日記は、天保10年4月22日から5月29日までが欠けていて、勝之助たちの出発後のことしか分からない。

すでに述べたように、桑名でたびたび話題になるおろくや真吾のことに鎌之助は関心をもち、おろくが来れば守りをするのにといいが、妹・弟についての具体的なイ

メージはもてなかったようである。鎌之助がおとなしくないのなら、おろくと取り替えましょうと柏崎日記に書いてあったが、どうだと平太夫が嘘をいうと、おとなしくするから、取り替えはいやだと鎌之助は答えている<桑, 天13. 7. 21>。しかし、おろくと真吾の特徴や行動には鎌之助の関心はあまり向いていない。

ところで、鎌之助が年下のものに興味がなかったのもない。かれの遊び友達、横村の勝におきょう（鏡）という妹があった。鎌之助がおきょうをよく遊ばせるのを見て、おろくが家にいたらどうなるだろうと、平太夫とおばばは話し合う<桑, 天12. 閏1. 8>。しかしそのおきょうは、医者にもかけぬうちに疱瘡のために急死してしまい、死顔を見た平太夫は、可愛そうで胸一杯になる<桑, 天13. 10. 10>。また、両地の家族は、子どもの身長や身体部位の寸法を表すものを何回も送っており、それを子どもに当てがうことによって、おとなたちはきょうだい間の差を実感として受けとめていたのである。

一方、おろくにとっては、兄鎌之助は相当現実性のある存在であった。桑名から送られてきたもの、あるいは桑名に送ろうと取ってあるものを通して、「あんちゃ」を大事なものとして感じるだけでなく、日記に書かれてくる鎌之助のエピソードを覚えており、しばしば話題にした。このように、おろくの記憶にない兄でも、日記によって結ばれることを通して、きょうだいとしてある象徴的な機能を果たしていたのである。

おろくと真吾の関係の発展は、当然のことながらも現実味を帯びている。真吾が生まれた日から、勝之助たちは、おろくに真吾を抱かせている。それにより、真吾はよそに上げないのだというような親愛の情を、おろくはもつようになった<柏, 天13. 7. 4>。また、真吾に対する興味もあり、寝ている真吾をみて歯がゆくなるのか、おろくはしつこくして、ときどき泣かせることもあった<柏, 天13. 6. 21>。真吾〔11週〕の反応が豊かになり、皆の関心をひくようになると、おろくはやけ気味となり、母親にねだり顔をする。真吾を抱くおゆきを見て不機嫌になることもあった<柏, 天13. 7. 29>。

その後、真吾は病気にかかるが、きょうだい関係は発展する。真吾をお向かいのお民におぼわせると、おろくがやきもちを焼き、よく寝ている真吾を突いて起こすこともあれば<柏, 天14. 5. 15>、二人でよく遊ぶこともある<柏, 天14. 11. 6>。そして、病気中ではあるが、真吾にも徐々に行動力がついて来ると、けんかも増えてくる<柏, 天14. 7. 2; 天14. 12. 12>。このようにして、2人のきょうだい関係の質が徐々に変わってくるのである。

#### 16) 仲間関係

鏡之助の場合、仲間との接触は、以前から始まっていたが、仲間との相互作用の様相は4歳2か月頃から急に変わる。僅か1月ほどの間に、仲間との遊びへの参加が劇的に増えて行くのである。最初から、年長の方がよく鏡之助の面倒を見てくれる。しかし、高度の遊びで、留五郎でさえ入ってしまうような遊びのときは、鏡之助は見ているだけである<桑, 天12. 閏1. 22>。しかし、鏡之助には、仲間との遊びの面白さが分かり、仲間が呼びにくると、ご飯も食べずに飛び出す。そして、仲間を家に連れてきたり、自分が遊びに出たりということが、どんどん増えて行った。

もっとも、最初から子どもだけの相互作用が、優勢になるのではない。鏡之助の仲間との接触の多くはおとなが介在したりモニターした接触あるいは相互作用であった。つまり初期には、鏡之助が太鼓を叩いたり、凧を上げてもらったり、庭に築いてもらった矢場で弓を射たりしていると、近所の子もたちが集まってくるというパターンが多かった。あるいは、年長の者に連れられた鏡之助が仲間の所へ出かけて行くという形をとっていた。そこから徐々に重心が移って、最後には、おとなの目から独立した仲間間での相互作用が増えて行く。

しかし、おもちゃの製作や修理、あるいは、子どもだけでは無理な遊びになると、おとなの援助が必要であるので、おとなの出番がなくなってしまうのではない。実に、おとなと子どもとは必要によって交じり合いながら、鏡之助の社会的世界を構成していたのである。

おろくについては、遊びの項でも述べたように、それほど活動的な行動パターンを取らないので、仲間関係も小規模のものに止まる。おろくの最初の相手は、お向かいのお民で、1歳2か月には、取り合いのけんかをしている。その後も仲よくしたりけんかしたりしながら、関係をもち続ける。しかし、おろくに子守がいる間は、おたみとの間の相互作用はあまり深まらない。その後、おろくの行動半径は徐々に広がるが、陣屋という制約も関係していて、仲間の数が大きく増えるほどではなかった。

最後に、真吾にはまだ仲間関係が発展していないのは当然である。しかし、1歳のときに、数えて3歳の男の子と、短時間の相互作用をもったことがある。2人は顔をつけて見たり、おもちゃのやりとりなどをした。相手の子どもが真吾に興味をもったからであるが、真吾も相互作用に関心をもったのであった<柏, 天14. 5. 9>。

#### 17) 行動統制ストラテジー

子どもと生活している過程で、おとなは繰り返し子どもの行動を制御する必要に会う。祖父母と両親がよく使うストラテジーの基本的性格は、子どもに強要してその行動を外から制御するのではなくて、本人の理解を通

じた制御の試みだといえる。それを、子どもの行動を中止させたり要求を思い止まらせたりするとき、子どもになにかをさせようとするときの2つに分けて説明する。

おとなが迷惑する行動を子どもがしても強いて禁止しないで、「困る」とか「どうもならんじゃ」で済ます許容的な扱いは、平太夫も勝之助もよく取っていた。鏡之助もおろくも、「止めろ」といわれた位で興味をもってやっている行動を中止する子どもではない。それが、鏡之助の場合には5歳ころから、心理的な行動統制法が効果をもつようになってくる。それは、すでに述べたように、桑名での関係を断って越後へやるぞということを、脅迫的ではなく、ほめめかしたり芝居して見せることによって鏡之助に伝える方法である。そのようなストラテジーの導入には、子どもの認知発達が前提となる（3歳前のときには、「越後へやる」も本当の効果をもたなかった）が、鏡之助が自分たちに愛着し、桑名での生活に満足していることを平太夫夫婦が確信していることも基礎となっている。

何かをしたいと主張したり、何かをしてくれと要求する子ども（「鏡にいじり抜かれ」）を思い止まらせるために、理解させようとしたことは、平太夫がしばしば、「いろいろだましても聞かず」[鏡之助, 2: 6]とか、「なかなか合点せず」と書いているところからも推察できる。しかし、一旦いざしたら鏡之助は簡単には思い止まらないし、「大だだ」を起こしたおろくにも勝之助はてこずる。そしてかれらは、余儀なく子どもの要求をいれることが多かった。

しかし、限度を越えると、おばばでも鏡之助の頭を叩くことがあり[5: 11]、素直に月代を剃らせないおろく[2: 0]に勝之助夫婦が体罰を与えたり脅したりして、お向かいの人が、「何事をする」と飛んでくることもあった<柏, 天12. 4. 7>。おろくの月代では、4歳前後の頃でも握り拳が必要なことがあった。また、罰としてよりも治療の意味で、不従順であったりめめそする子どものちり毛に灸をすえることもあった。そのようなとき、鏡之助は泣くことなく、おろくは大声で泣きわめいた。近所の人それが聞き付け、おろくをかばいに入ってきたこともあった。<柏, 天13. 5. 14>。それを知った桑名のおばばは、倍量の灸を四つもすえるとはとんでもないことだと不機嫌になった<桑, 天13. 7. 20>。しかし、真吾の病気に悩まされているおきくは、おろくに辛抱強く対処することも困難になったのであろうか。いうことを聞かないおろくを、勝之助にいつ雪の上に放り投げて戸を閉めさせてしまう<柏, 天13. 12. 2>。そしてついに灸も、他の子どものような着物をこしらえてくれとだだをこねるおろくをだまらせる手

段となって行く〈柏, 天14. 6. 14 ; 天14. 6. 24〉。

最終的には罰を与えることがあるにしても、まず子どもに納得させて行動を制御しようとするのは、子どもの状況理解を促進するのに役立つと考えられる。平太夫と一緒に寝たくてたまらない鑱之助〔6 : 3〕が、今日は無理だと状況判断できると、自発的に諦めることも見られたのである。また、まさに心理学でいう欲求充足の遅延も可能となった〔鑱之助, 5 : 9〕。

次に、子どもにある行動をさせようとするときに取られる戦略は、どうであろうか。もちろん、「なになにしやれ」で効果があれば、それで終わる。そうでないときに平太夫が鑱之助に対して取ったのは、俗にいう「おだて」の戦略である。たくさん食べさせるために、相撲が強くなる、重くなるといい、食べた後で、実際に相撲に負けてやったり、とても持ち挙げられないと実演してみせる〔鑱之助, 3 : 5〕。6歳前には、言葉だけであるが、基本的に同じ方法で、平太夫は病後の鑱之助に食事を取らせている。勝之助があまり取らないこの方法は、単におだてによって子どもを操作しているのではない。鑱之助に納得させかれの自己概念に訴えて、かれが積極的に行動することをねらったものと筆者は解釈する。

#### 4. 結 語

詳しい討論は次回にまとめて行すが、ここまでの分析で明らかになった子どもの発達と生育環境の特徴の主なものを、ごくかんたんにまとめておこう。

① まず、子どもに対するおとなの態度が、きわめて nurturant (養護的) であるとともに、百四、五十年前の子どもの家族生活についての mentality には、主観的にはあるが、今日のそれとほとんど変わらない側面が少なくないことを指摘したい。この点に関して、渡部家が当時のわが国の下級武士層を代表していたといえないのはもちろんのことである。また Pollock (1983) からも推測されるように、子どもについての日記や伝記を書くこと自体が、子どもに対するプラスの構えの反映であるだろう。しかし、子どもらしい特徴を認識してそれに応じた取り扱いをし、いろいろの機会をとらえて子どもを楽しませるという意味での子ども中心の生活をし、子どもの喜びをわが喜びとする態度は、決して両渡部家だけに限られない。子どもを取り巻くおとな、なかでも桑名の親戚（とくに佐藤家のおばばさは、それこそ鑱之助をなめて可愛がった）と、柏崎の竹内家の人々やおゆき（元子守）とその母親（柳橋のおばば）の態度は、劣らず養護的である。これが下級武士の常民性（堀田, 1969）と関係あるのか、あるいは、わが国の伝統的な態

度 (Kojima, 1986c) と関係付けるかは別としても、子どもに対する許容的（ときには溺愛的）態度は、ある程度の一般性をもっていただろうか。

② 渡部家の子どもたちは、一日の内の多くの時間を、たいてい誰かと結び付きながら生活しており、一人で過ごす時間は短かったと考えられる。結び付きをもつ相手は、家族内外のおとなと子どもで、多様である。きょうだい、仲間との関係もさることながら、多様なおとなと日常的に相互作用をもっていることが目立つ。つまり、子どもにとっては、多くのおとなが身の回りにいて、そのときそのときの子どもの必要に応じ得るのである。このようなおとなの availability が、子どもの頭の中に形成される社会的ネットワークを特徴付ける。その背景には当時の親戚づきあい・近所づきあいのパターンがあるのは当然である。

③ 子どもの扱いの今ひとつの特徴は、日々の生活時間からいっても、また未来への展望との関係からいっても、子どもとしてせかされていないところにある。また、性に関する話題や酒のように、おとなの生活と子どもの生活とが重なる領域がある。子どもをおとなの世界から切り離す一方で、将来のために子どもをせかせるようなことはほとんどなかったのである。

④ 最後に、発達研究者として一つの仮説を構成したことを述べる。それは、子どもの社会化過程に関することであって、子どもの行動の発達的变化と、社会化の担い手としてのおとなの働きかけの両方の継時的データが与えられていて、始めて読み取れたことである。

3. の2) や5) の項目で述べたように、おとなが子どもを乳なめから遠ざけたり、共寝の対象を移行させたい場合に、次のような過程が進行するのではないかと思われる。まず、現在の子どもの行動や状態はかなり固着したものであるが、それは望ましくなかったり不都合であるとおとなが気付いて、行動変化の当面の目標を立てたとする。そのとき、おとなは行動を直接制御して変えようとはしない。おとなはまず、「～はもう止めないか」とか、「～したら」と言葉で示唆をする。それに子どもが従わなくても無理しないでおく。

それを繰り返しているうちに、おとなの示唆はたんに行動水準での瞬時的な働きかけに止まらずに、子どもの自己の水準にも働きかけていることになってくるのではないだろうか。子どもは「そうしよう」とか「もう止めよう」といい始める。しかし、まだ行動は前のままである。ここで、おとなの言語的示唆が子どもに取り入れられたことになる。しかし、それはまだ、子どもが自分で自分の行動を制御できる段階にまでは達していない。しかしそのうちに子どもは、状況によっては、目標とされ

る行動を取れるようになる。そのとき、子どもは自分を納得させるための「理屈」を考えだすことがある。そして最後には、目標とされた行動が安定して取られるようになるのである。このように、「いうことも、することもしない」段階から、「いうけれども、しない、またはできない」段階を経て、「ちゃんとする」段階(目標)へと移って行き、それには、社会化の担い手の言語的示唆が自己概念と結び付いてだんだんと内面化し、ついには自己制御できるようになって行く過程が働いているのではないかと考えられる。もちろん、これは子どもの社会化のひとつのコースにしか過ぎないであろうが、今後、理論的・実証的な検討に価すると考える。

#### 謝 辞:

この論文にまとめられた研究の過程で、多くの方々と機関の直接的・間接的支援を得た。それらがなければ、ずぶの素人として、この日記に取り組むことはできなかったであろう。この論文の内容に関する責任は、完全に筆者に帰せられるべきものであるが、これまでに筆者が受けた支援を記して、感謝の気持ちを表したい。

山下宏明氏(本学文学部)は、筆者がまだ澤下春男氏(鈴鹿短期大学)ほかによる翻刻の進行を知らなかった段階で、無謀にも桑柏日記の解読のための勉強を始めようとしたときに、自ら師匠役を買って出てくださいました。予備的な学習の開始後半にしてその必要が無くなったのであるが、氏のご厚情は筆者の研究の原動力としてずっと働き続けたのであり、それを忘れることはできない。澤下春男氏には、その翻刻版に全面的によらせていただいた他に、系図を始めとする種々の情報の提供や便宜の供与でお世話になった。彦坂佳宣氏(立命館大学)と皆川美恵子氏(お茶の水女子大学)からは、筆者と異なった学問分野でこの日記を研究されてきた先達として、教示と励ましを得た。堀田吉雄氏の解説と註から筆者は多く学ぶところがあった。氏を中心とした桑柏日記研究会が存続していたならば、新参者の筆者として多くを学べたであろうにと残念である。

それに、原本所蔵者の伊東春夫氏、写真による印影版を所蔵している桑名市立図書館、および四日市市教育委員会から、資料の閲覧と提供、情報の提供に関して種々の便宜を図っていただいたことに感謝する。

#### 文 献

有地 亨 1986 日本の親子二百年 新潮社

Bronfenbrenner, U. 1979 *The ecology of human development*. Cambridge, MA.: Harvard University Press.

原 ひろ子・我妻 洋 1974 しつけ 弘文堂

速水 融 1986 人生五十年? — 徳川日本の農民の生涯 時間——東と西の対話 服部セイコー Pp. 164-189.

彦坂佳宣 1984 幕末期における転封藩士の言語生活 国語学 139集, 13-27.

久木幸雄ほか(編) 1977 日本子どもの歴史(全7巻) 第一法規

堀田吉雄 1969 桑・柏日記民俗抄 伊勢民俗学会

本田和子 1982 異文化としての子ども 紀伊国屋書店

本田和子 1986 消滅か拡散か: 子どもらしさのゆくえ 思想の科学, No 1, 2-9.

本田和子・皆川美恵子・森下みさ子 1985 わたしたちの「江戸」 新曜社

小嶋秀夫 1979 我が国の育児思想の伝統 角尾 稔・東 洋(編) 教育学講座 4 学習研究社 Pp. 106-114.

小嶋秀夫 1982 児童観研究序説 — 児童観研究の意義と方法 三枝孝弘・田畑 治(編) 現代の児童観と教育 福村出版 Pp. 4-41.

小嶋秀夫 1983a 現代社会と子ども 三宅和夫ほか(編) 波多野・依田児童心理学ハンドブック 金子書房. Pp. 971-999.

小嶋秀夫 1983b 歴史的にみた我が国の児童発達観 永野重史・依田 明(編) 発達心理学への招待 1 新曜社 Pp. 185-205.

小嶋秀夫 1985 日本人の児童発達観 鈴木乙史ほか(編) パッケージ・性格の心理 1 ブレーン出版 Pp. 17-29.

Kojima, H. 1986a Child rearing concepts as a belief-value system of the society and the individual. In H. W. Stevenson, H. Azuma, & K. Hakuta (Eds.), *Child development and education in Japan*. New York: Freeman. Pp. 39-54.

Kojima, H. 1986b Japanese concepts of child development from the mid-17th to mid-19th century. *International Journal of Behavioral Development*, 9, 315-329.

Kojima, H. 1986c Becoming nurturant in Japan: Past and present. In A. Fogel & G. F. Melson (Eds.), *Origins of nurturance*. Hillsdale, N. J.: Lawrence Erlbaum Associates. Pp.123-

139. (in press)
- 松田 武 1978 一大名家の系図過去帳よりの統計的観察 医学史研究, 49号, 231-238.
- 皆川美恵子 1982 近世末期の「桑名日記・柏崎日記」にみられる養育文化——子どもの病気を手がかりとして—— お茶の水女子大学人間文化研究年報, 6号, 209-221.
- 皆川美恵子 1985 伝統的社会における養育——江戸時代末期に書かれた「桑名日記・柏崎日記」に見られる養育—— 保育学年報, 1985年版, 47-54.
- 中江和恵 1985 日本人の子育て再発見 フレベール館
- 大田 堯ほか(編) 1979 子ども観と発達思想の展開 (子どもの発達と教育2) 岩波書店
- 大藤ゆき 1969 児やらい(2版) 岩崎美術社
- Pollock, L. A. 1983 *Forgotton children: Parent-child relations from 1500 to 1900.* Cambridge: Cambridge University Press.
- 斎藤たま 1985 生とものけ 新宿書房
- 桜井庄太郎 1982 日本児童生活史 日本図書センター [初版, 1941]
- 司法省(編纂) 1877 民事慣例類集 司法省 [2版, 1880]
- Stewart, A. J., Winter, D., & Jones, A. D.

- 1975 Coding categories for the study of child-rearing from historical sources. *Journal of Interdisciplinary History*, 4, 687-701.
- 菅江真澄 1971- 菅江真澄全集 未来社
- 竹内利美ほか(編) 1969 諸国風俗問状答 日本庶民生活史料集成 第9巻 三一書房 Pp. 453-843.
- 脇田はる子(編) 1985 母性を問う——歴史の変遷(上・下) 人文書店
- 渡部平太夫・渡部勝之助 1839-1848 堀田吉雄(校訂) 桑名日記・柏崎日記(抄) 谷川健一ほか(編) 日本庶民生活史料集成 第15巻 三一書房 1971. Pp. 501-765.
- 渡部平太夫・渡部勝之助 1839-1848 澤下春男・澤下能親(校訂) 桑名日記・柏崎日記 全8冊 校訂者私家版 1984. (注1参照)
- 山住正己 1984 新しい子育ての知恵をさぐる 岩波書店
- 柳田国男・橋浦泰雄 1935 産育習俗語彙 恩賜財団愛育会
- 横山浩司 1986 子育ての社会史 勁草書房
- (1986年7月31日 受稿)

ABSTRACT

CHILD DEVELOPMENT AND FAMILY LIFE APPEARING  
IN TWO SETS OF FAMILY DIARIES WRITTEN BY LOW-RANKING WARRIORS:

*Kuwana Nikki* and *Kashiwazaki Nikki*, 1839 - 1848. I

Hideo KOJIMA

This article analyzes the descriptions of child development and family life appearing in two sets of family diaries written by a low-ranking warrior at Kuwana (now in Mie Prefecture) and his son-in-law at Kashiwazaki (now in Niigata Prefecture). At Kuwana, the grandparents lived with their grandson, who was two-and-a-half years old when his parents and two-month-old sister were transferred to Kashiwazaki. By 1847, three more children were born at Kashiwazaki. The grandfather at Kuwana and the father at Kashiwazaki kept diaries almost every day for about nine years. This was done to keep the family members living apart informed about one another's family life and related topics. They occasionally exchanged the diaries.

The diaries, totalling about two million hand-written characters, were set in type by Sawashita and Sawashita (1984). The topics of the diaries range widely, and include, for example, family living; vocational life; the behavior, development, and illnesses of the children; the weather; occurrences of natural disasters and fire; the price of foods, goods, and services; local gossip, and so on.

The present article, which deals with the first half of the diaries, analyzes their content with regard to seventeen aspects. These include, (1) rituals and customs related to child-rearing, (2) infant nursing and foods, (3) toilet training, (4) physical care, (5) physical contact, co-sleeping arrangements, attachments, and identification, (6) illness and medical treatment, (7) motor development, (8) play, (9) sociocommunicative development, (10) cognitive development, (11) acquisition of intellectual skills, (12) curiosity about sex, (13) development of self, (14) caretaker-child relations and social network, (15) sibling relations, (16) peer relations, and (17) behavior control strategies.

Though the final conclusions will be made in the succeeding article, a few points are made concerning the general characteristics of the child treatment of the family. First, adults were very nurturant and permissive to children and a considerable part of adults' daily life was devoted to child-centered activities. They were also highly insightful of the developmental process of young children. Second, the major part of children's time was spent in interacting with adults or children, and the time children spent alone was very limited. Third, children were not hurried by adults in their daily lives and in the future perspectives. Adults provided children with learning opportunities for academic skills in accordance with the emergence of the children's interest in these activities. Finally, detailed descriptions of child behavior and child treatment in the process of weaning and the changing patterns of co-sleeping suggest the existence of a three-phase transition from the adults' attempts at behavior regulation to self regulation by the children.